

2005年6月17日開催 シティズンシップ教育推進ネット主催シンポジウム

ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて  
民主主義と教育，公共，個人について考える。

～『シチズン・リテラシー』出版をとおして～

記録報告書

シティズンシップ教育推進ネット



2005年6月17日開催

シティズンシップ教育推進ネット主催シンポジウム  
「ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて  
民主主義と教育、公共、個人について考える。  
『シチズン・リテラシー』出版をとおして」



● 大久保

そろそろ会を始めさせていただきたいと思います。本日は、みなさまお忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。私は「シティズンシップ教育推進ネット」代表をつとめます、大久保正弘と申します。どうぞよろしくお願いたします。本日は、「ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて民主主義、教育、公共、個人について考える。『シチズン・リテラシー』出版を通して」というタイトルで、この会を進めさせていただきます。



2年ほど前の私と鈴木先生の出会、それが『シチズン・リテラシー』の出版に繋がりました。鈴木先生がある講演の中で、それ自体はシンクタンクのお話でしたが、「シチズン・リテラシー」が日本にも必要ではないかというお話をされておりました。そこで私は編集者をしていたこともありまして、このシチズン・リテラシーは重要だと鈴木先生に駆け寄って、名刺を渡しまして、教科書を作らしようという話をしたんです。そこから話が弾みつつも、なかなか企画が進まなかったんですけれども、このたび2年越しでようやく本になりました。その中で副産物という変なんですけど、このシティズンシップ教育推進ネットという活動も同時に進めて参りました。そして、教科書を作っていく過程で、どのようにして市民教育を進めていったらいいかということを考えていけないといけない、人を巻き込んでいけないといけないと考えるようになりました。

3月3日にも、長沼豊先生をお呼びしての講演会という形で、英国の市民教育についての勉強会を企画しました。今回は、日本における実践に向けて、その切口やスタートとして、みなさまと一緒に、市民のリテラシーとは何か、民主主義とは何か、という事について考えていきたいと思ます。最初にシンポジウムのパネラーのみなさまを、私の方から簡単に紹介させていただきます。

コーディネーターの鈴木崇弘さんです。(鈴木：よろしくお願ひします。) 鈴木さんは、大阪大学特任教授を経て、シンクタンクの準備室長をなさっていらっしやいます。

次にパネラーの村尾信尚さん。現在、関西学院大学の教授をしてらっしやいます。(村尾：よろしくお願ひします。)

成田喜一郎さん。(成田：よろしくお願ひします。) 東京学芸大学附属大泉中学校副校長、中央大学兼任講師をなさっています。

川北秀人さん。(川北：よろしくお願ひします。) IIOHOE「人と組織と地球のための国際研究所」の代表をなさっております。

最後に打越紀子さん。(打越：よろしくお願ひします。) 埼玉県北足立郡吹上町議会議員を経て、現在、「表現教室」主宰、東京新聞市民レポーターをなさっています。

この豪華な執筆に携わっていただきました4人の方々に、市民とは何か、シチズン・リテラシーとは何か、民主主義とは何かについて語っていただきます。

それでは、鈴木さんよろしくお願ひいたします。

#### ● 鈴木

大久保さんどうもありがとうございました。それではシンポジウムを始めさせていただきます。まず始めに私の方から、今回の『シチズン・リテラシー』という本が出たということで、それに対してどういう思いがあつてこういう本を作らせていただいたか、という事をお話しさせていただいて、その後に議論させていただきたいと思っています。

先程、大久保さんから、大久保さんと私が赤い糸で結ばれてこういう本が出たというお話があつたんですけども、私はそれとは全く別に、以前に海外に留学して、その後日本で政治とか、政策研究とか、そういうことに関していろいろな活動をしてきたんですね。

そういう中で、今、自分が何をやっているかとか、自分がやっている問題が社会の中でどういう意味があるかというのが、最初はなかなか分からなかつたんですけども、実際に個人的にいろいろな活動して行く中で、「あつ、自分がやっていることはこういう事なんだ。ああいう事なんだ」という事が分かるようになったんです。それからまた、私は政策関係の仕事をしているんですけども、政策をいくら作つても、やはり有権者とか市民の方々の方に受信してくれる能力がきちつとないと、なかなか政策というものが受け止められない。つまり、出す方と受ける方とキャッチボールというか、うまいコミュニケーションが出来ないといけない、という風に思つたんですね。

そういうことを、先ほど申し上げた個人的な経験からもふまえてよくよく考えてみると、子どもの時からきちんと政治とか、例えば、民主主義は何かとか、立法とは何かとか、司法や行政とかつていう言葉で言われるものが、本当はどういうことを意味するのか分かつていたのだろうか、と思うようになったのです。国会議員がいて、その人達はあなた達の代表ですつていう事は、社会科の教科書なんかで学ぶわけですけども、よくよく分かつてなかつた。自分が小さい時、それから社会に実際に出る前までに、そういったことに関する基礎知識や、それらのことを理解するスキルがあることで、もっとその理解度が深まって、実際に社会に出たときに、先ほど「キャッチボール」だつていうお話をしましたけれども、受け取るだけではなくて、逆に、自分が「ピッチャー」になる



ようなことも含めてやれるんじゃないかと思ったんですね。

そんなことを考えていく中で、社会科とか倫理とか、公民とかいろいろ、政治教育、市民教育に関係するような授業というのは今もあるわけですが、やっぱり、ちょっと違うんだなあって思うようになったんです。それならば、将来的にはそういう風なものを義務教育の中で教えられるようにできたらと思ったわけです。それをある講演会で話したところ、大久保さんとの赤い糸がうまく作用して、こういう本になったわけです。今回は義務教育で使うという教科書まではいってないんですけども、その前哨戦として、今日もパネラーとして参加していただいている方々を中心として、他の方々にも関わっていただきながら、みなさんのお手元にもあるかもしれませんけれども、(見せながら)こういう本を作らせていただいたということなんです。

ただ、作らせていただいてこれで終わりではなくて、逆にいうと、これからが正に一步一步始まりなんだなあとという風に思っております。今回ご出席のみなさまの中でアンケートがあって、「これはイギリスの市民教育のパクリだ」というお話をいただいているんですが、実はパクリでもなんでもありません。私は、そのことは全く意識しないで、自分がこういうようなことが必要だということの問題意識がまず先にあって、本を作らせていただいたんですね。ただ、編集をしていく中で、私の隣にいる村尾さんから「鈴木さん、そりゃやっぱりおかしいよ。突然こんな本を一気に作るんじゃないくて、やっぱり海外にあるイギリスとかアメリカの国のように、先に民主主義が成熟している国でやられている政治教育とか、市民教育とか、そういうところの教科書を翻訳したりしてから、次のステップとしてこういうのをやるべきじゃないか」ってお話がありました。あまりにも的確なお話で、「あっ、それはそうだな」というように考えています。今日も若干持って来ているんですけども、これはアメリカの政治教育・市民教育の教科書なんですね。ほかにも、みなさんご存知かもしれませんが、こういった、アメリカの今わりと売れていると思いますけれども、歴史教科書があるんですね。こういうのを見ると、やはり『シチズン・リテラシー』という本を作ってみて、非常にこういう本を作るのは難しいなっていう風に思ったんですね。それは何度も他のところで申し上げているんですけども、日本の中でも政治学などの分野や専門の方が、民主主義の話とか、市民の話っていうのは、理論的なこととか、欧米ではこういう事をやっていますよという研究をされている方がいらっしゃいます。他方で様々な市民活動をされている方もいらっしゃるんです。ところがその理論とそういう市民活動みたいなものをうまく繋いでいって、ある程度抽象度を上げるようなものがないっていうことに気がついたんですね。

それからもう一点なんですけど、つい最近、ある新書で『明治デモクラシー』っていう本が出版されました。別に、『大正デモクラシー』という本もあるんですけども、やはりそれらを読むと、政治の中に起こったことが書いてあるだけで、じゃあ、それが市民とか、有権者とかにどういう意味を持つのかっていうことが、それらの本を読んでも分からないんです。まして、義務教育の中で子ども達が読んで、それが社会の中でどういう意味を持つのかということが分かるようなものがないんだってことが分かったんですね。

それで、先程申し上げましたように、海外ではこういう教科書が既にあるわけですが、そういうのを見ていると、やはりアメリカであればアメリカンデモクラシーがあり、イギリスであればイギリスデモクラシーがあって、それが歴史的な経緯で蓄積されているんですね。正にそれをもとにして教科書っていうものが作られているんです。だから、今回のこの本を作った時に非常に困ったのは、その素材になるようなものが日本に存在していないということで、そういうことを書けるような方が、今の日本の中には多分いないんだなとも思うんですね。

今回この表紙は、服部さんという造形作家の方が作って下さったんですけども、正にこれは、家族で民主主義の芽を育てるようなデザインになっているんです。この本をもとにして、民主主義っていうものを我々が一から作っていく作業がこれから必要なんじゃないかなと思っています。

このようなことを一つのラインにして、パネリストの方からさまざまなお話をいただきたいと思っております。時間にもよりますが、もし可能であるならば会場のみなさまとのインタラクションの時間をとって、正に民主主義的なやり方で、シンポジウムを進行させていただきたいと思っております。

それではまず、村尾さんの方からぜひお話をいただきたいと思っているんですけども、まず、

民主主義とか市民の役割について、ご自身が活躍され提言されてきた観点から、お話をいただけたらと思います。それと、もしよろしければ、今おやりになっているご活動についてのお話も散りばめながら、お話ししていただけたらと思っております。よろしくお願いたします。

## ● 村尾

みなさんこんばんは。私はかつての経験でもあるんですが、実は霞ヶ関で国家公務員を25年してきました。主な仕事には予算編成ですとか、国債に関する事、「こくさい」と言ってもインターナショナルの国際ではありませんで、借金の国債、国債課長をやっております、国債残高が500兆円を超えるという、もう世界一の借金課長だったんです。そういう事もあって、ちょっとみなさん方とは入り方が回り道していると言うか、邪道かも知れませんが、私の問題意識はやっぱり日本の予算が心配であって、もうこれでは国の財政が破綻するのではないかと、いうところから私は入りました。そう考えたときに、やっぱり予算をやっていますといういろいろなきがらみがあります。予算をつける手続きのうえで、正に今、小泉さんが苦勞しているように、そういうしがらみだらけの中で、もしこれからの日本が財政危機を回避するとするならば、これはやっぱりしがらみを断ち切って、草の根レベルからの改革のようなものが起きない限り、この日本はもうタイタニック号のように沈没しちゃうんじゃないかという問題意識を起こしました。



数年前に、その時には大蔵省の課長をやっておりましたけれども、自宅に、ちょっとお寿司をご馳走するからという事で、近所の7、8人の主婦のみなさんに集まってもらって、そこで私は、「もうこんなことで日本財政はパンクしますよ。やはりもうしがらみを断ってみなさん方と一緒に世の中を、地域を変えていかなくちやいけませんよ」というようにぶったところ、みなさん方の反応は非常にシラけましてですね。「村尾さん、そんなドンキホーテみたいなことを言っても無理よ。世の中どうせ変わら

ないんだから」と言って、私がつとったお寿司代は無駄になりました。

その晩私は布団の中に入って、「本当にこんな事でいいのだろうか。今の日本の危機というのは、実は私どもが敵とみなしている守旧派勢力ではなくて、善意の人々の無気力、無関心、これが本当の私達が闘わなくてはいけない敵なのではないか」というように思いました。それで、私のできることを言ったら、公務員という立場がありましたけれども、「Why not」という任意の市民団体を立ち上げて、実は、何人かの方がここに参加されていますけれども、納税者の側、市民の側から「まちかど行革」のようなことをやってみようじゃないかということで、一つの団体を作ってホームページで呼びかける、といったことを始めた次第です。

私がこの『シチズン・リテラシー』の本の執筆に加わらせていただいたのは、これだけ大きな曲がり角にある日本の中で、私は財政を担当している立場からなんですが、過去の日本の歴史のように、黒船が来るとか、マッカーサーがやって来るというような、他人にこの日本の社会を改革してもらおうというような外圧は、幸か不幸かも来ないと思うんですね。そうすると、私達自身の手でこの世の中を変えて行かなくてははいけない。その時にはちょっと先程も申し上げましたように、既得権益のしがらみにがんじがらめになっている者ではなくて、ひとりの市民、ひとりの納税者、ひとりの消費者、そういう立場からこの日本を変えていかなくちはいけないと思ったんです。その時には、やっぱりそういう人々に向かって、先程鈴木さんがおっしゃられたような、民主主義とは一体何なんだ、当事者意識を持ってこの日本社会を考えていかなくちはいけないのではないかと、という問題提起をしなければいけないと私なりに考えた次第であります。確かに、こういう本がまだ日本の中で出来ていませので、試行錯誤いろいろあるかと思えますけれども、これが少しでもみなさん方のお役に立って、さらに新しいステージに入っていければという思いで参加させていただきました。よろしくお願いたします。

● 鈴木

ありがとうございました。

今のお話で日本の民主主義の中において、村尾さんのお寿司代はコストになったという話がありました。冗談はさておき、それでは次に、成田さんの方から教育現場から見た民主主義のお話や、また、成田さんは将来の有権者とか将来の市民を預かっている訳ですから、そういった観点から見た教育についてもお話をいただきたいと思います。

● 成田

成田です、よろしくお願いします。最初に私がお話しをしてみたいという事が、つい先日、ほんとに2、3日前に聞いた話なんです、それから始めたいと思います。教師というのは、わりと喋る方が得意で聞く方が苦手なんです、私の同僚のある社会科の教員が、電車の中で3人の大学生の会話を聞いたそうなんです。その学生たちは、ある大学の経済学部に行っている真面目そうな雰囲気の子だったそうで、その中の一人が、今非常に落ち込んでいると言う。なぜ落ち込んでいるのかなと聞き耳を立てていたら、「うちのゼミの教授が『お前達、好きなテーマを設定して、レポート書け。とにかくその設定しなさい』と言ってくれたんだけど、いやあ、僕らはもうテーマを与えてくれて、これやれって言われればきちっとやるようにやってきたけれども、それがなかなか出来なくて、とてもつらいんだ。」と言うそうなんです。このままこんなことやっていて、本当にこの学校に入ってよかったんだろうとか、さらには就職できるかなあとか、そんな話までしている大学生3人の実際の話なんです。



その話を同僚から聞いた時に、私は今、自分達が育てている、またそれに関わっている子ども達が、将来大学に行ったり職業に就いたりしたときに、「自分で問題を探して設定できる」といった力を本当に身に付けているだろうか、と考えさせられました。少なくとも私がいる学校ではやっているつもりではいるんですが、その学生も中学校、高校の時にこういうことを習わなかったな、という言葉も漏らしたそうなんです。そんなところからちょっと話を起こしていきたいなと思います。

私は社会科の教員で、しかも大久保さんの方から、社会科教育の変遷にふれて真偽の程を語れという宿題をもらってしまったので、実はこれ大変なことなんです。私の行っている東京学芸大学附属大泉中学校というのは、昭和22年、1947年に創立した学校で、いわゆる日本の社会科が誕生した年とともに生まれた学校です。私は今大学の方でも非常勤で講義をしている関係で、初期の社会科の研究を今始めていまして、それを授業の中で話しているんですが、つい最近読んだばかりの文献の中にこんなことがありました。この学芸大の大泉の前身は、東京第三師範学校附属中学校という名前だったんですが、そのさらに前には国民学校がありました。敗戦直後の1946年の話なんです、その時に、中学校の社会科の教員になった室田という先生がいらっしやいまして、当時の公民科の授業の記録が残っているんです。そのなかで私が吃驚したのは、あの極東国際軍事裁判のラジオ放送を国民学校の生徒に聞かせて、そして、それをもとにして討議の学習を組織しているんです。討論です。

それ以外にも、農地法のこととか労働組合のこととか、いわゆる戦後の民主主義の枠組みが出来上がってくる過程の内容を、当時の国民学校で扱って、討議の学習を展開していた記録が残っているんです。その討論、討議がさすがにうまくいったという記録ではなくて、結局は地につかなくて、喋りすぎで終わっていたというような記録も残っていました。そんな話を目にした時に、まさに時事的な問題、目の前にある問題を、果敢に当時の国民学校の教員が、生徒とともに学習を組織していったところに、非常に大きな感銘を受けました。

その後、1947年に本校の前身が出来るんですが、その時に学校の教育目標というものを組織するわけです。その歴史を調べておりましたら、その中にこんな話が出てきます。実は、うちの学校の教育目標はすごく簡単で、子供もすぐに分かるような、いわゆる知徳体の、この目標三つしかありません。たくましい体をつくろう、正しい判断をしようというようなことで、すぐに覚えられる目標です。これはおそらく、全国のかなりの学校であるスタイルだと思うんですね。

ところが、1947年の目標なんですが、その中にこんな目標があります。長いのですがちょっと読んでみます。戦後のスーパー中学生を育てようとしているんです、これ。「鞏固な意志を持ち、忍耐強く、自主積極性に富み、実証性科学性を身につけ、真理を探究し、自己を信ずるとともに、透徹した批判力を持って、自己の生活を統御し、…」長いんですよ。「…豊かな感情を持ち、広く芸術を理解し、常に健康に留意して頑強な体となり、生のよろこびを感じ澁刺とした明朗な中学生。」これが第一項なんです。

次に、このあたりから公民的な内容が入っているんですが、「家族を敬愛し、家庭内における自己の地位と責任を自覚し、協力して家庭の繁栄と和楽ために努め、家庭生活を科学的合理的に考え、これを能率的にする知識を身につけ、たのしい、明るい、民主的な家庭生活を営もうとする中学生。」すごいです。

そして三番目。まだあるんです。「社会のなりたち、社会の理想をわきまえ、敬愛の心を広く、礼儀に厚く、憲法の精神を体し、社会秩序を尊重して暴力をにくみ、虚偽の宣伝に迷わされることなく、国際間の協力につとめ、平和を希求し、社会の幸福、繁栄のために奉仕し、民主的な社会を楽しむ中学生。」

最後です。「経済生活を営んでいくために必要な知識を身につけ、貿易の真義を理解し、艱苦に耐えて公正なる経済生活を営み、職業に対する社会的意義を理解し、正しい勤労観を持ち、境遇の変化に対応できる自立の精神に富む中学生。」以上なんです。

これがどういう形で作られたかって言うと、実は教員が決めたものではないんです。これを設定するにあたっては、保護者、生徒のアンケート、そしてさらに保護者との話し合いがありました。ここ最近、中学校と地域の協力で学校運営が進められていますが、まさにそれがもう始まっておりまして、協議会も何回も回を重ねているんですね。戦後初期のいわゆる新しいものを作るための息吹が、ここで感じられるんです。

その後、社会科教育がどうなっていくのか、ここで戦後の社会科教育60年の話をすると、このまま5分じゃ終わらなくなるので、端折って展開します。ここにいらっしゃる方々は、かなりの幅の層の方がいらっしゃいますが、私なんかは中学校の時代は、政治経済、社会っていう学習をしました。当時は公民っていう分野はなかったんですが、公民という分野が登場してくるのは、1969年の昭和45年ですね。そこから社会科教育の目標に、いわゆる「公民的な資質の基礎を養う」というものが入っていく訳です。その直前の1958年、昭和33年の学習指導要領においては、ここまでは「民主主義の実現に向けて」とか、「建設に向けて」とかっていう、プロセスを非常に重視する指導要領だったんですね。ところが「公民的分野」が登場してきた以降は、「既存の民主主義を理解する」というスタイルになるんですね。

確か、この『シチズン・リテラシー』のなかでも鈴木さんがお書きになっていると思うんですが、民主主義は完全なものではないけれども、それを追求するプロセスが非常に大事だということをおっしゃっています。そういったものがどうもある時から、既存のものとして与えられて、それを理解したり、受容したりするような方向に移ってきている。

そのなかで、社会科における公民的なものを一体どう考えていくのか。先ほどの今日の大学生の話にありますように、自らが問題の設定をして、解決する事が出来るような「主体的な学生」が、どうやって育つかということ、ぜひ、このテキストを頼りに考えていきたいなと思っています。このテキストは大学生を中心とした、あるいは、市民の方を中心としたテキストとして考えていたという経緯がありますけれども、私としてはこれを中学生の副教材として使いたいなと思うし、あるいは、それを指導する公民的分野、社会科教育を行う教員のテキストになればと考えています。

まだまだ話したいこともありまして、非常にラフな話でしたが、とりあえず、その話の入口ということでここで一度閉じさせて下さい。よろしくお願ひします。

● 鈴木

成田さん、どうもありがとうございます。私ももう一度中学生になりたいのですが、多分1万年かかってもなれないんじゃないかなというように思いますけれども。今、成田さんからご提起いただいたお話は非常に重要なので、また戻ってお話しさせていただければと思っています。それでは、川北さんの方からお話しさせていただきたいと思います。今、川北さんは、これからご本人もご説明になると思いますけれども、市民を育成する方の立場で、叱咤激励しながらやられている方なので、多分厳しいお話も出て来ると思います。よろしく願いいたします。

● 川北

川北です。よろしく願いします。育成するというほどのことではなくて、市民団体向けに団体の運営のあり方や、市民とのコミュニケーションみたいなことを、年間100件位、全国いろいろなところを回らせていただいて講師をやったり、最近では行政と市民団体との協働について、どう適切に促していくかといったようなことが年間20件位あったりといったことを、主にやっております。

私どもの組織の名前は、「人と組織と地球のための国際研究所」という、宗教団体みたいな大きなテーマの名前なんです、スタッフはたった4人です。組織目的は「地球の全ての生命にとって調和的で民主的な発展のために」というもので、設立の目的の中に、我が国だけでなく、もう少し広い観点でみて「民主主義」を適切な形で運営できるかということ、テーマに掲げています。その実現の過程として、市民団体の運営能力の向上、エンパワメントが最も主要なテーマです。

先程のお二人のお話をお聞きいただいてお分かりかと思うんですが、教育を通じて何が実現されなければいけないのか。民主主義教育は、「民主主義が分かった」というだけでは駄目で、知るだけではなく、実際に行動に変えなくてはいけないという時に、その行動を継続的に運営する力や、意欲をどう作っていくかが大切です。

最近、行政の方々とお話ししていると、とにかく市民団体と協働したいと言うんです。裏返して言うと、市民団体に安く仕事を出したいということです。今まで100万円かかったものが30万円とか、20万円でやってくれるんじゃないかと思っている人達もいる。それにほいほい手を挙げる市民団体もいたりするんですね。別に手を挙げることもそのものがいけなんじゃなくて、本当にそれでいいのかって議論をした結果、つまり、地域の住民を巻き込んで、やっぱりこれは20万円でも俺達の責任でやっていこうぜという結論が出て動くのならいいんです。でも、俺は少なくとも20万円ほしいということで、周りに相談しないで決めてしまう。

単に地域の市民活動が増えれば、単に全国のNPOが増えればいいということではなくて、それがどのようにその地域を適切な方向に導いていくかということから言うと、民主主義を「知っている」だけではなくて、継続的に出来る力が必要なんです。

これは市民団体だけでなく、議会もそうなんですけれども、民主的な運営について、頭で分かっているだけではなくて、やろうっていう意欲と、それを継続的にやっていく体力みたいなものが必要だと思うんです。最近、地域で小学校の廃校などをどう使っていくかについて議論する会に、ファシリテーターと呼ばれたりすると、気になるのは「話はできるが、ニーズが見えてない市民が多い」ということなんです。これは本当に気になっています。

民主主義的な手続きなるものに則っているかどうかから言えば、当然、手続きとしては民主的です。でも、それは運営体制としても民主的なんですか。ここまでは俺達がやるけれども、ここから先は行政がやるべきだとか、あるいは、ここは分担しようよという話、つまり手続きが民主的なのだけではなくて、運営そのものが民主的かどうかということに対する理解や、それを実際にやりこなしていく力が、まだまだ残念だけど不足しているな、と感じています。

国債を発行してまで地域社会に色々なサービスを普及させようということは、村尾さんも調整にご苦労された時期もあるかと思うんですけれども、そこにはやっぱり、それを要望してきた市民が残念ながらいる事も事実なんです。「行政がやれ」と予算の積み増しを要求した市民がいて、今、その人達に手続きだけ民主的ということで、お任せしちゃって大丈夫かという、残念ながら、市民団体の活動の実態から申し上げれば不十分です。運営能力、運営主体としての主体的な民主性とい

うような、責任を負ってまで継続的に地域の担い手となる、継続的にそのテーマの担い手となる、といった力を育てていかなければいけないと思います。

僕が何故、こういうことを本気でやっていかなければならないと思ったかという、90年代の一時期、プータローしていた時期があるんです。その時に、アメリカの民主主義教育の教科書（指導書）みたいなものを見たんです。そこに、幼稚園で「三権分立」をどう教えるかということが書いてあるんです。それを読んで、なるほど、これって制度の理解が重要なんじゃないかと、回して行く力をどう育てるかという要素が学校に欠けていたということに、問題があったんじゃないかと思ったんです。これは職業教育でもそうですね。ニートにならないためにどうしたらいいかといった場合、知識を詰め込むことが重要なんじゃないかと、やって行こうという意欲と力をどう沸きたたせて



いくかということに関するプログラムが、我が国には欠けていたな、と感じるようになりました。

その当時、僕は環境問題に関心があったんです。環境問題について、マスメディアを通じて知らせても、法律を作っても駄目。では、地域で住民が自ら支えていくために、どんなことをやっていかなければいけないんだろうか、と考えたのがこういう仕事をするきっかけになりました。

#### ● 鈴木

川北さん、実践にもとづいたお話ありがとうございました。結論がこれで出たらほんとうはいいかなと思います。今のお話のなかでも地域のお話が出たと思うんですけども、打越さんは実際に政治にも関わられています。地域のなかでどういう形でコミュニティを作ったらいいとか、市民を育成したらいいかということを実際におやりになっているという立場から、民主主義や市民の役割について、ぜひお話をお伺いできればと思っております。よろしくお願ひします。

#### ● 打越

はい。埼玉県の小さな吹上町という人口3万人足らずの町なんですけれども、そこから参りました打越紀子と申します。10年近く前になるんですけども、私が選挙に出て議員になったってことがありまして。何故議員になったのかと言うと、もともと生協の活動をしているんですね。で、安全な食べ物ほしいとか、ゴミを減らすようにしようとか、そういう活動の中から、「もっと社会に広めるためには、政治を、世の中を変えなくちゃいけないんじゃないか。じゃあ私達でグループを作って政治活動をして行こうよ。それじゃグループの中で誰か一人議員を出そう。じゃああなたどうですか。」ということになったんですね。

で、そのことを最初に家族に相談したときに、夫が、「えー、政治に関わるの」って。「ちょっとそういうのは止めてくれた方がいいんだけどなあ」って言ったんです。で、私は「政治って言っても生協の活動の延長みたいなものよ」って言ったら、途端に「あっ生協の代表か、それならいいんじゃない」って言うんですね。生協の活動と政治の活動ってそんなに違うものなのかしらと思うんですけども。同じって言えば同じなんです。社会に関わるっていうこと、社会をよくしていこうっていうことで。だけど、政治って言うとなんか、うーんちょっと止めてほしいなって思っちゃう。もしかしたら、自分の息子がとか、自分の親がとか、政治に関わろうと思うと言ったら、みなさんは「あっ、頑張ってるね」って送り出せますか。ちょっとそんなことに関わるのは、そんなことに首突っ込むのは、ってブレーキ掛ける人も中にはいるんじゃないかな、多いんじゃないかと思うんです。で、そんなことで、何故そうなのかな、やっぱり政治ってちょっとこう遠い存在だし、身近じゃない。だけど、役場とか役所って言うのはもう身近ですよええ。

役所はいろんな仕事をしている。でも、あんまり身近じゃないのかなあ、何なのかなあと思っていました。で、いろんな市、町に視察研修っていう、宴会旅行じゃないかって揶揄されるんですけども、いろんな町に行かせていただいて、そうすると、わりと市民が元気な所っていうのは市民参加の仕組みがあるんですね。先程、川北さんがおっしゃったように、手続きだけの市民参加ということもあるんですけど、それは第一歩で、まずは、それしかない所がある。

いろんな所の広報を見るとよく分かるんです。わがまちの広報を見ると、「議会の傍聴はいついつやっています。どこそこです。」とか、もうちょっと良いところだと「教育委員会はいついつです。農業委員会はいついつです。どうぞ傍聴に来て下さい。」って書いてある。そういう所もあれば、そういうのは一切ない所もあります。それから、今度こういうことをやろうと思うんだけど、市民のみなさんの意見を募集しますって書いてあるところもあれば、そういうのは全然ない所もあります。

だから、それはもう市によってすごく差がある。どうして差があるんだろうっていうと、そういう首長を選んでいるから。じゃあ、どうしてそういう首長が選ばれるのかって言うと、市民に力がないからなんです。だから、鶏が先か卵が先かなんですけども、たとえば、ある首長になった途端に、市民が動き出したり、いろんな仕組みが出来る。で、もしかしたらそれは次の選挙で変わっちゃうかもしれない。で、そうならないために仕組みとしてきちりと作るということが大事だと思うんです。そうやっていろんな市町村によってうんと差があるのは、市民の力が現れているなあと思います。手続きだけの市民参加から、もう一歩二歩進んで、運営ってところまで考えられるようになればすごくいいんですけども、まず、第一歩に市政を変えるということかなって思います。

大体、こういうパネリストになりますと、女性一人の場合、「女として、母としてどう思いますか」というようなことを訊かれるんです。「市民」になるっていうことがちょっと似ているな、と思ったのは、子供を生むと誰でも親になれるんですね。出来ちゃった婚になったとしても、親になるとそれなりに勉強するんですよ。良い親になろうって。で、まあちょっと育児書を読んでみたり、教育の本を読んでみたり、学校に行ったりする。だけど、市民っていうのは、自然に親になるように、二十歳になったら選挙権あるよっていわれる。だけど、そのことで、良い市民になろうなんてあまり思わないですね。だから、そこがちょっと似ていて、全然違うところでもあるのかなと。で、親になるのは嫌だなあって、面倒臭い子供を持つのは嫌だっていう人が今、結構増えていて、子供を持たないでいるわって言う人もいるんだけど、市民になるのは嫌だわ、選挙権はいらないわって事はちょっと出来ない訳で、だから、市民の力をつけるってことをきちんと教えて行かないといけないうなってことを思いました。



## ● 鈴木

現場の話も含めていただきました。ありがとうございます。それと、ちょっと話がずれるんですけども、私は親っていうのは子供によって親にされるんじゃないかなという気がしています。そういうような意味合いが市民の中にもどこかにあるとすれば、多分、市民が市民によって成長させてくれる存在になるんじゃないかなと思います。それで、みなさんのお話を聞いていると、単に手続きだけを学んでもやはり駄目で、どうやってそれをうまく回していけるか、民主主義的に回していく力を蓄えて作っていくか、そこら辺がやはり今日のお話の中心になるのかなという風に思っております。

じゃあ、そのように回していく力としての「シチズン・リテラシー」を日本の中でどうやって作っていくのか、それから、すでにみなさんに実践にもとづいてお話をいただいたので、それが多分ある意味のジャパニーズ・デモクラシーというか、日本型民主主義を考える上でヒントになるんだと思います。より今までのみなさま方のご経験を踏まえた上で、やはり、日本の民主主義の中でこういうものは活かしたら良いとか、こういうものは問題ではないかとか、そこら辺のお話とかを伺えればと思います。

あと、今回みなさんに、ご協力いただいてこの本を作らせていただいた訳ですけども、ぜひ、書かれている中で、ご自分がやった体験からこういうような問題があるとかないとか、本当はこんなことも書きたかったんだけど、全体編集をしている鈴木がうるさいから消しちゃった所とかですね、そこら辺のことも含めてお話をいただければと思います。村尾さん、ちょっと元気がないですが、いかがでしょうか。

## ● 村尾

お昼食べてないもんですから。

私はですね、やはり行政にいた立場から言うと、民主主義をどう回して行くかということでは、情報公開だと思うんですね。私が情報公開で痛い目に遭ったのは、三重県に出向して、総務部長をやっていた時に、市民オンブズマンの人から、北海道から沖縄まで、職員の出張命令簿を情報公開しろと言われたことがあります。三重県も各県横並びで、県庁職員の出張命令簿を出したところ、その1枚に阪神淡路大震災の当日に、三重県庁の職員が新大阪の駅から新幹線に乗って九州方面に出張に行きましたっていう復命書が出てきて…。

それで、三重県のカラ出張が発覚したその時の総務部長だったものですから、県民のみなさんからもお叱りの電話、抗議の手紙、脅迫状までいただいて。それから、私の総務部の中には県税課という所があって、県民税をみなさんからもらうんですが、県税の不払い運動、NHKの受信料拒否みたいな、そういうことをされた時に、ほんとに情報公開って言うのは怖いなという思いをしました。その結果、三重県では当時11億6千万円の裏金が見つかり、10年かけて金利も付けて14億円を返済しました。それから処分も受けました。私は総務部長として一番重い、懲戒処分というのを受けています。減給1/10の4か月とで…。これは効きましたね、さすがにね。

それで、やはり、情報公開が役所を変える一番の武器になるということを痛切に思いまして。やはり、公務員の文化大革命は情報公開から始まる。で、私も総務部長ということで、一方で行政改革なんかをやる部署でもあったものですから、財政再建だとか、行革ということでドンドン、ドンドン、たとえば、農林水産部を解体したり、現業のいろんな部署を廃止したりして、当時は「デーモン村尾」とか、「江戸から来た悪代官村尾」って言われて嫌われたものです。そういう時に、例えば、労使交渉なんかで、労働組合が村尾を生かしておけぬってことで、拡大闘争本部っていうのを作りまして、私一人に対して、大体、7、80名位の組合員と団交をやるんですが、彼らの話を聞いていると、民間の人が聞いたなら聞くに耐えないようなこと、要するに、「これは県庁職員がやっているから市民のみなさまは信頼して我々に任してくれている。それを民間に外部委託、ないしはNPOのみなさんにやらせたら、とてもじゃないけど信用が置けない」というような事を、密室の労使交渉では言うわけですね。

それで、一回目の交渉が終わった後に、組合の幹部に、「考えてみると、私も雇われマダムにしかすぎないんで、労使交渉ということで、私を使用者ということで話をするのはおかしい。私も給料

をもらっているし、みなさん方も給料をもらっていて、その給料を払っている人というのは、究極の雇用者、最終の使用者であって、その人達は三重県の県民なんだから、第2回目の労使交渉では、みなさん方が100人の組合員で来られるならば、私も100人三重県の納税者を連れて参ります。私が司会をするので、今日私に言った事と同じ事を三重県の県民のみなさんにおっしゃって下さい。それで、県民のみなさんになるほど三重県の県庁職員は立派だ。こんなことはやっぱり我々には出来ないって言うんだったら、今まで通り組織は認めるけれども、ふざけるなって言う話になったら、みなさん止めて下さいね」と言う話をしたんです。すると、村尾と労使交渉するのはもう拒否されてましてねえ、お陰で助かったんですが…。

私が言いたいのは、これってアメリカの民主主義でもそうなんです、やはり、情報こそが民主主義社会のツール、武器だと思いますね。アメリカでも「ザ・フリーダム・オブ・インフォメーション・アクト」っていう、(その当時の)司法長官かなんかの、法案を提出するときのスピーチを見ていまして、デモクラシーの本質というのは、やはり情報の自由っていいですか、知る権利っていうことを彼が言ってますけれども、そこが、私は川北さんがおっしゃったとおり、回す力の根源は、情報公開じゃないかなと思っています。

● 鈴木

どうもありがとうございました。

村尾さんは、今はデーモン村尾さんではなくて、このあいだもお話する機会があったんですけども、民の生活というか、大学教授をエンジョイされておられるようで、官僚機構で働くことはこんなに嫌なことだったのかというようなお話をされましたよね。今はデーモンではなくて、「エンジェル村尾さん」という感じでしょうか。

さて、成田先生にぜひお願いしたいんですけども、先程国民学校のお話にふれて、日本にも実はそういうような事があったんだというお話がありました。今、ご存じのように新しい動きとしては、品川の方で市民科が出来たり、杉並区立和田中の藤原先生もいろんな課外授業をやられたり、さらには、三鷹市立第四小学校でアントレ授業をやったりですね、そういう新しい動きが出ていますね。まだものすごい大きなシェアにはなっていないですけども、シチズン・リテラシーとか、政治教育とか、市民教育と連動するような流れが出来てきていると思うんですけども、そこら辺を踏まえてですね、これから、学校の中でのシチズン・リテラシーとかジャパニーズ・デモクラシーを、どういう形で子ども達に教えていくかという、可能性と希望とを、お話しいただければと思っております。



● 成田

すごい課題ですよ。

● 鈴木

沢山課題はありますので。

● 成田

先程、この本を書くにあたって書ききれなかったこと、というお話がありましたけれども、私はこの本の中では、いわゆる経済の単元で、携帯電話を入口にして、経済や開発の問題、環境の問題の担当ということで、非常に総花的な話で短い文章なんですけれども書かせていただきました。実はここに至った背景にはですね、(今、会場に見えましたけども、) 執筆者の一人の風巻さんが開発教育の専門家で、そちらの方を先に取られてしまったので、私は経済を取るといって、そういうような分担になったんですが。

公民的分野の授業の中でしばしば出て来るのは、憲法の学習、政治の学習、そして経済、国際社会の問題というのが中にあるわけなんですけれども、私が実際、社会科の必修授業をもってやっていた時には、「経世済民学」っていうタイトルで、公民の授業のプリントを毎回作っていたんです。「経世済民」といいますと、いわゆる経済と政治が渾然と一体となっていた江戸時代の「経世学」がありますが、実際にそういう意味では、国民を助ける、あるいは、救うために一体何が出来るのか、国を愛する、世の中を愛するということはどういうことなのか、そういった非常に大きな、包括的な意味合いを持って考えていく、というようなテーマでプリントを作っていました。

その時に私が一番強く感じたことは、26年間位社会科の教員をやっていて、今も一コマですが持っていますが、先程「親は子供によって育てられる」とのお話が打越さんの方からありましたけれども、「学校の教員は、子供、生徒達によって教師になる」という部分がかかなりあるということなんです。

私が以前にやった授業の中で、これはまあ、ある先生の実践のパクリと言いますか、試行実践だったんですが、今、北海道教育大学の先生になられています、大津和子教授が、「1本のバナナから」という実践をされたんですね。つまり、このバナナから、その世界、日本を見つめていくという授業をされたことがありました。それを私は、本で読まないでラジオで聴いたんですが、面白いことをやる人だなあとということで、さっそく私もそれを試行してみたんです。そうしたら、私の教室の子ども達がえらく動き始めまして、スーパーや八百屋さんにあるバナナのラベルとかシールとか、そういったものを探しながら調査活動を始めていくんですね。その反応を見て、身近なバナナ1本からでも、世界を見る入口になるんだなあ気づかされました。

先程川北さんが、やっぱり知ることだけでなく、意欲や継続する力とおっしゃったんですが、正に、その対象となる子ども達、あるいは学生達にとって、一体何が一番身近なものにあるのか。そこから入っていくということで、今回は携帯という、私も初めてここで書き下ろした、授業でやっていない題材なんですけれども、そこから環境問題なんかをみていこうということでした。

先ほど「市民科」の話が出ておりましたが、今日も会場にいらっやっていますでしょうか、お茶の水女子大学の小学校の先生、まさにそちらでも市民科を研究実践されてきているわけなんですけれども、非常に立ち上がってきている動きがありますね。そこには今までやって来た社会科の中における公民の学習も直面している、大変大きな課題があるのではないだろうかと思うんです。1998年の学習指導要領から「総合的な学習」というのが出てきて、その中で、国際化の問題とか、環境問題とか、あるいは、高齢化の問題とか、そういった様々な時事問題を扱うということが、一応学習指導要領の中に出ています、実際にそれを動かしていく教員の力とか、あるいは、それを実際に組織していただくカリキュラム構成力とか、そういったものが問われるようになって来ました。

一方で、今、それが否定的な状況で動いている部分も一部であるんですが、実は、それがもしかすると、きちっとこの「シチズン・リテラシー」を身に付けることで、環境問題などの直面している問題に対して、なにか道が開けて行くような兆しもあるのではないかな、やはり希望は失いたくない、っていう感じが私はしております。

ともかく、今、私達が、子ども達にとって如何に身近な素材から世界、日本、政治、経済といったものを見せていくのかということ。そこにはともすると、政治的な中立性の問題も出て来るわけ

ですけれども、今起こっている結論の出ていない問題を、教員、あるいは学校が積極的に取りあげていくことが必要だと思うんです。そのための方法の一つに、いわゆる学習のリテラシーとして、これは戦後初期の「討議法」っていうものがありますけれども、例えば、ディベートをやる中で、教員が一つの方向性を決定するのではなくて、その議論を組織していくことは可能ではないだろうかなあと考えております。詳しいディベートの仕方については、私の著書がありますので、(教育出版ではないんですが、某社から出ていますので、) 見ていただければと思います。

● 鈴木

多分、今日だけではなかなか議論はまとまらないと思うんですけれども、ぜひこれから、みなさんにも考えていただいたり、意識していただきたいと思っています。それでは、川北さんの方からお話をお願いします。

● 川北

はい。先程の、アメリカの幼稚園で教えている「三権分立」の話について、心残りになるといけないので具体例を申し上げますと、幼稚園で遠足に行く話なんです。まず行く前に、みんなでどこに行きたいか、話し合いをさせるんですね。どここの山に行きたい、川に行きたいとか。とにかく話し合いをして、行く場所が決まって、行って、帰って来る。次は社会見学に行くというときに、市役所に行くんです。その時に、議会と行政のどちらから先に見るかという、議会に先に行くんです。先程の遠足の話から続いているんですけれども、決めるのは自分たち＝議会で、連れて行ってくれるのは先生＝行政であるということなんです。

これが、議会と行政の関係です。もちろん、裁判所が別にあつた方が良いということは、子どもたちにも分かるわけです。そうすると母親は怒りにくい。母親がルールを決めて、母親が叱るといふのは、その後、家庭内で問題になるらしいんです。

でも、ルールを作る人、執行する人、守る人というのがバラバラで、一番大事なのは自分たちでルールを作って行く、動かして行くということに責任を持つことですねっていうことを、体験的に教える。だから、子ども達が議論して山に行きたい、海に行きたい、川に行きたいっていう時に、ある子どもは先生に決めてもらおうとする。それを、「決めるのはあなた達です」と言って、敢然と先生は拒否する。こういう教え方をすると「三権分立」って説明しやすいよっていう、幼稚園の先生のために向けた教材です。面白いでしょ。

こういう考え方や手法が百何十項目か書いてあるリストがあつて、アメリカの民主主義教育はこのように出来ている、ということの説明する資料なんです。お金は、連邦議会から出ています。連邦政府からではなくて。こういうのを見た時に、ああなるほどと。文部科学省が教えるからエネルギーが湧いて来ない、ということのを僕は思いました。

もう一つ、エネルギーの話で申し上げますと、先ほど生協のお話をさせていただきましたが、最近、年齢的に言うと50代とか60代の方々が運営されている組織からよく呼ばれるんです。その組織の活性化をしたいと。50代の男性ばかり集まっている組織と、50代の女性ばかり集まっている組織とでは、会議のスタイルがかなり顕著に違います。前者は、ばっちり資料を作って、発言する順番まで決まっていて、ここで承認、異議なしっていうことが手続的に決まっていて、統制がとれて、さあ、やるのかなと思ったら、動かない。一方、後者は、議事進行もしない、資料もあつたもんじゃない。べちゃべちゃ喋っているんだけど、じゃあみなさんそれで頑張りましょうって言う、「おー」って言って頑張っちゃう。

やっぱり民主主義は制度じゃないな、と思いました。例えば、子ども達を暴力から守る活動をしているCAPなんかもそうだし、子ども劇場もそうなんですけれども、会議資料を見ていると、こんなので決まるのかしらって思う。でも、決まったら動くんですね。腹の据わりの問題です。ニーズに近づいている人達、自分たちがこれをやらなきゃいけないのだという、心に火がついている人達は、手続きがどうあろうとやっちゃうんです。そこに、民主的なものと、手続的に担保することは重要なんです。そこで、僕はと言うかという、例えば、「ここの部分を事前に知らせておけば、嫌だつて言う人が減る」、あるいは「ここの部分を事前にちゃんと制度化していくことによって、み

んなの不安が減るよ」とお話しをすると、議事録は何故つけなければいけないのかとか、議案は何故事前に作っておかなくてはいけないかっていう事に対する納得感みたいなものが生まれてきます。

ですから、制度の正当性を主張するものではなくて、納得や使いこなしの問題として、議案や議事録の有効性を伝えます。ところが、男性達はそういう事はすでに知っているんですね。でもエネルギーが湧いて来ない。そういうときは、会議の仕方を教えてくれてと言われても、現場に連れて行くんです。子ども達の支援、子育ての支援をやりたいっていうお父さんたちに、会議室で何百時間話しても仕方がない。現場に手伝いに行かせるんですね。お母さん達がどういうことで困っているのか、そのお母さん達と一緒に住んでいる筈の男どもに、インタビューにも行ってもらいます。そこで、ニーズについて再発見するんです。自分たちが頭で考えていた事と、現場で起きている事にこんなにギャップがあって、まあ理想と現実みたいなものですね。そして、現実から理想にどう近づけて行くかという手続きを作りなさいって言うと、男は得意なんですよ。

組織作りといった、民主的な運営を導いて行く力は、相手の置かれている状況によって違うんだろうと思うんですけども、先程のアメリカで幼稚園の子ども達に三権分立を教えるっていうのも、あれは制度を教えているのではなくて、役割や、何故それをしなければいけないのかという、納得を教えているんだろうな、と思うんです。

でも、教育というのは、どうしても言葉を使っちゃうと、知識を教えなきゃ、制度を教えなきゃ、流れを教えなきゃいけないと思ってしまう。しかし、状況に応じて、ニーズを伝えたり、安心や安全に繋がるメリットを伝える事が重要だと思います。そう言う意味では、民主主義の教え方って実に多様にあるので、学校のカリキュラムの中だけで考えるのではなくて、先程から出ているように、「経世済民」の世界ですね。社会で使っていくためのツールとして、あるいは、力として教えているんであって、それを実際に試して来っていうことが大切なんですよ。

このように、学校の中で完結しないことが、実は重要なところなんです。「総合学習」というのは元々どういう言葉だったかと言うと、「インテグレイテッド・ラーニング」つまり、「統合的な学びのための時間」ですね。あれは、総合的に学習してもらいましょうという時間じゃなくて、統合的な学びを自ら組み立てが出来る子どもになってもらいましょうという時間だったんです。だから、土曜日に3時間という方法もありますよっていう選択肢を残したつもりだったんですけども、そういう風に使ってもらえていない。民主主義を教える方法って、どうカリキュラムに落していくかだけではなくて、どう力として触発していくかという手法についても、もっと多様にあってもいいと思います。その辺の枠組みを草の根で育てるために、僕も努力しているつもりですけど。

## ● 鈴木

本当にその通りですね。次のお話をと思ったんですけども、取りあえず、打越さんの方からもお話していただきたいと思います。



## ● 打越

はい。今、「議会を見て」っておっしゃるのを聞いて、「あー、これ議会見られちゃったら、まずいなあ」って思ったんですよ。私がいろいろな、自分の所の議会だけじゃなくって、国会から、県議会から、市議会から、小さな町村議会まで聞いたところによると、大体共通する議員のある共通点というのがあるんです。私は議員の三原則って言う風に名付けたんですけど、まず、議員はよく覚えていて根に持つんです。古いことをよく覚えているんです。俺はあいつにこの事で反対された、とかっていうのを。それで、議案なんかを審議していて、あいつが出して来たのか、じゃあ俺は賛成できないな、といった調子なんです。また、会派でね、なんとか党が出して来た議案は、こっちの党はすんなり通すわけにはいかないから、1回おいて次の議会でやろうとか、そういう事もよくあるんです。

もう一つは、意地になるんですね。1回言った事に意地になって、まあ、総理大臣もそうでしょうけど、意地になっているんですね。ちょっともう状況が変わったとか、理論的にこうだとかという事が分かってても、意地になってそれを通しちゃう。

もう一つは、自分の非を認めない人が非常に多いんです。だから、根に持つ、意地になる、自分の非を認めないっていう議員の三原則を備えている議員が圧倒的に多くって、議会というのは議論する場になって思ってくる方が多いんですけども、そうじゃなくて、執行部が出して来たものに、質問したり、どうかって言ったりするだけで、議員同士が議論するってことはないんですね。もう殆どないと思っていただいいていいと思います。だから、民主主義教育で議会を見てから行政を見て言っても、議会で決めてないんですよ。具体的に行政が出して来たものに、はい賛成って。反対する人も殆どいないのが日本の議会なので、これを見ても、日本では教育には全然ならないなと思います。

じゃあ、何かって言うと、私が、ゴミのこと、環境教育をやった時にドイツに行ったら、ドイツには幼稚園の子供にゴミを分別する方法を教えているテキストがやはりちゃんとあって、そういうカリキュラムがあるんですね。私が小学校の時はどうだったかなと振り返ると、5、6年生の時に、新聞を読んで考えるっていうノートが1冊あって、それを毎日でなくてもいいけど、最低週1回出しなさいっていうのがあったんです。その時は、嫌で嫌でしょうがなかった。半分面白い事もあったんですけど。ちょうど、ロッキード事件真っ盛りの頃で、歳が分かりますね。その頃で、何だか分かんないけど新聞を読んで書かなきゃいけない。で、新聞っていうのはいろんな事が書いてあるから、それも興味を持つ一つだったなあと、そういう形でも社会との繋がりを持つ時間というのは、今でも小学校にあるといいなあと思いました。

先ほどオンブズマンの話が出たので、ちょっとだけ。私、原稿書いた時に、情報公開の話を少し書いたんですけど、とりあえず市役所へ行って、いろんな事業見てごらんっていうような事を書きました。私のところも今度合併があるものですから、隣の市の議会の資料なんかちょっと見てきたら、市議会に補助金が出ているんです。何に出ているかって言うと、市議の親睦会に出ているんです。議員クラブなんていうのに。実を言うと、私のいた議会も出ていたんですけど、私が入って2年目位の時に、議会がそれもらっちゃまずいだらうっていうことで断ったんですね。それ以来、うちの町はないんですけど、隣は市議の親睦会に出ている。そういうことは全国であるんです。

ところが、もう一つ。緑の会補助金、8万円って書いてあって、これは何ですかって訊いたら、市議を3期以上やった人が親睦会を作っていて、そこに補助金を出していますって言うんです。誰もそれ何も言わなかったんですけど、今まで。今年はどうかと思って、情報公開請求したら、突然、この会は6月に解散することになりましたって言うんです。だから、多分うるさいのがやって来た



から、これで終わりと思ったかもしれないんですけど。で、そのオンブズマンも、制度としてやる人がいるわけですけど、その人達の一文の得にもならないんですよ。でも、やる。だから、そこにそういうエネルギーを持つ人が出て来なければ、いくら情報公開の制度があっても、情報公開を求める人がいなかったら、市民に開かれてこないの、それをやる人がやろうっていう気持ちになるようなことが、教育の場で生まれて来ればいいなあと思います。

● 鈴木

ありがとうございました。

今、打越さんのお話を聞いていて思い出したんですが、今日の朝に、中国人の方のお話をお聞きしました。そうしたら、中国人のエコノミストの方なんですけれども、彼は、中国は本当の社会主義じゃないと言っていたんです。日本は社会主義の国だから、社会主義という理念を掲げている中国は、日本から社会主義を学ぶべきで、逆に、日本は中国がとっているような民主主義的な、資本主義的なやり方を学ぶべきだっというお話をされていたんですが、なんかそれを思い出したんです。

私もほんとうのことを言うと、日本ってほんとに民主主義がある社会なのかなって思っているわけです。先程、村尾さんや打越さんから行政のお話が出ましたけれども、やはり、基本的には行政ってというのは、国家を中心にして回っているシステムなんですね。そういう意味では、シチズン・リテラシーの厳しい部分というのは、こういうカリキュラムを作って、それで終わりなんじゃなくて、逆に言うと、それに並行して、国会とか、地方議会とかそういう所も含めて、それから、それとの関わりのある行政とか市民を含めて、そういう所がうまく回って行くような力をつけていかなくちゃいけない。そういう意味では、正に、川北さんがおっしゃられたように、市民だけが民主主義を回す力を持っていても駄目で、多分、国会も、地方議会も、行政もみんな持つようなことをやらないと、駄目なのかなっていうことを、お話を聞いていて思ったんですね。

こんなこと言い出すと、いつまでたっても、今回のシンポジウムの結論が出ないので、もうそろそろエンディングに入り始めないといけないのですが、もし、このパネリスト相互の間で、お話を聞いていて、逆に、違ったセクターのこういうようなお話をしたいとか、こういうような事をやれば、シチズン・リテラシーとか、日本の中でのジャパニーズ・デモクラシーが動くようなサベスチョンがあるとか、そういうようなお話があれば、是非お願いします。

● 村尾

じゃあ僕が。ちょっと元気を出して。

打越さんが言った情報公開に関して、強くそういう人たちの背中を押すには、僕はやっぱり、日本の源泉徴収の制度が問題だという気がしているんですね。これ、アメリカでも欧米でも源泉徴収制度はあるんですが、確定申告は必ず一人ひとりしなくちゃいけないんですね。日本の場合には、もう確定申告する必要がなく、全部会社なり役所がやってくれるんですが、いわゆる痛税感がないんですね。やっぱりそこは、自分たちがどれ位の税金を払っているかという感覚がないと、なかなか税金の使い道や、その他に対して情報公開をして、とはならないので、私は日本の徴税制度というものの変更も考えてもいいかなと思います。

一つ例を挙げてみると、アメリカの独立戦争、あのボストンの「ボストン茶会事件」で始まったのも、要するに、アメリカの植民地の人からの「代表なきところ課税なし」という言葉から始まったんですね。やっぱり、税金の問題っていうのは民主主義を考える大切な問題なんですね。だから、そういうところが大切な問題だと思います。

● 鈴木

ありがとうございました。ほかにどなたかありますか。

● 川北

はい。折角なので。では。

今後の可能性の話として、まず「教科書」を作って、次は現場からご覧になられた場合、使い道

とか、教え方とか、プログラムを作る当事者の方の意見が伺えたらと思います。

●成田

そうですね、学校を代表して話しているような形になっちゃっているんですけども。実際にこのテキストをどう使うかという以前にですね、やはり、今の学校の現場で、シチズン・リテラシー、そのものを考える、あるいは、実際に指導するような枠組みが一体どこにあるのかどうかっていう、そこを考えて行く必要があるのではないかなと思うんです。

一つは今、社会科っていう教科はあって、総合的な学習という時間もありますけれども、そこで、現場の教員が閉じた学校の中でのみ、カリキュラムを構成してやるのではなくて、外に出て行く、あるいは、学校に招き入れるということをしながらか、そこで変わって行くものがあるんだろうなと。

例えば、私は1980年代から90年代前半は、環境教育の問題で、練馬区の中高生のグループを支援する活動をしていました。それは形を変えて今も続いて行われています。

学校に来ていただくっていうスタイルも、非常に今、重要なのかなと思います。

先日、ドイツの青少年指導者の方たちの研修がうちの学校でありまして、その方々が非常に面白い話をしていまして、日本も例のOECDの2003年度PISA調査で、学力の問題が話題になっていまして、ドイツもかなり落ちているわけですね。その中で、どういう方向で考えていくかという、教科の授業を増やすのではなく、社会教育との連携のなかで、学校に入って来てもらい、総合学習を展開することで、いわゆる「学力問題」に対応していこうとしています。「学力」観が非常に広い意味で、まさに市民のリテラシーというような形で展開しようとしている。これは非常に有益だなと思っております。

それで、おそらく今、いろんな所で市民科を立ち上げようとしているところを見ても、子ども達が地域社会やなんかに出て行くこと、学校に招き入れることで、いわゆる、多様性、ダイバーシティ、そういったものがさらに民主主義の根底に必要になって来るのかなと思います。

実は、うちの学校も、今、学校の教員だけでなく、いろんな方々に支援いただいていますけれども、そこでまず一番問題なのが、教員の、ある意味では、社会科の教科の課題もありますけれども、教員でない方々が入ってくる事に対する軋轢もあったりして、それを経験することで一つずつ広がって行くのかなと思います。ですから、一つの教科のカリキュラムというより、学校そのものをどう変えて行くのかという、正に、民主主義ですね。シチズン・リテラシーを広げて行くことになればなあって思っています。

●鈴木

どうですか。

●打越

あの、私、この紹介文の所に、「表現教室」って書いてあるんですけども、これがとても今大事だなと思ってる事の一つなんです。子ども達が、小学校のうちには、この問題分かる人って言ったら、パッと手が挙がるんですけど、中学になると途端に挙がらなくなるんですね。私、それこそ、ゲスト・ティーチャーって言う事で、中学と高校に伺ったことがあるんですけども、この事、どう思うって言って、はいって、手が挙がって来ないんです。何か言うのが恥ずかしいとか、みんなの前で喋るのが恥ずかしいとか、手を挙げているといい恰好しているとか、そういう風に見られちゃう。

そこが変わらないと、この意見を、自分の意見を言うとか、社会を変えるにも、第一歩の自分の意見を言うとか、自分が発言する事とかって言う事にすごく抵抗がある子は、お互いにすごく気を遣っているんですね。あの子あんな事言ったらとか、そんな事言ったら悪いかあとか、自分だけでなく、先生の事まで慮っちゃって、妙に気を遣っている。そこが変わらないとなあっていう気持ちですが、結構あります。そうじゃないですか、成田先生、どうでしょう。

●成田

確かに、小学生は元気ですね。うちの学校でも、中学校1年生、言ってみれば小学校7年生が、

非常によく手を挙げるんですが、それがだんだん挙がらなくなる。しかし、実際、頭で考えてる事というか、肌で感じているものは、中学校3年生だとかなりあるんですね。

それを如何に聞き出す場面を設定するかに関して言うと、学校の中、行事、あるいは、学校の外との関わりで、まさに、体験っていうものが非常に大事になると思います。その一つの手段としては、とにかく最初の段階では言葉にならなくても、例えば1時間の授業を聞いた後に、たった一つのキーワードでも探して、それについてコメントしてみるとかですね、自分がこの授業を受けて、私はこういう事を感じた、こういう体験をした、こういう事を認識したっていうことを、発信できるような機会を積み重ねて行くことが非常に大事なのかなと、そんな風に考えています。

#### ● 鈴木

質問にならないかもしれないんですけども、1点だけあるんです。海外のって言うわけではないんですが、こういったアメリカやなんかの教科書を読んでですね、何がこっちの方がいいのかなと思うと、物語性があるんですよ。だから、読んでいて頭に残っていくんですね。もちろん、1492年「いよくに もえた」っていうのは覚えられないかもしれないけども、コロンブスっていう人がいて、どのくらいの年にアメリカ大陸を見つけて、どうのこうのということがわかりやすいわけです。しかもそれがですね、理由付けがきちんと書いてあって、なぜコロンブスがそこに行ったか、行ってどうしたか、どうやってアメリカっていう社会が出来てきたのかが、はっきり書いてあるんですね。だから、川北さんがおっしゃられたように、学校教育だけではもちろん自己完結しないんですけども、やっぱり、こういう素材自体の在り方なんかも、ちょっと日本の場合は十分じゃないのかなという気がするんですね。

それからもう1点は、先程コミュニティの話とかいくつか出ていたと思うんですけども、やはり、今もいくつか、小学校でも、中学校でもわりと成功したり面白い動きをしている所は、学校だけでクローズドの、インナーサークルでやらないで、オープンにして、地域と一緒にやっている。地域に支えられる学校になっているような、まさに、こういった市民科とか、市民教育とか、政治教育をやっているところとか、先程出てきた起業家精神を養うようなところなんかが、その時に、地域が入ってくることによって、学校教育が自己完結しないで、社会教育とか、生涯教育にも結びついていく。私の経験もそうですけど、先程、教師は子ども達によって教師にされるっていうお話が、成田さんからあったと思うんですけども、教えることによって学ぶといった状況があって、全体として、うまく流れて行くのかなあという気がすごくしているんです。そこら辺はどうでしょうね。みんな、成田先生にお話がいつちやうんで、誠に申し訳ないんですけど、成田先生が「文部大臣」になられたおつもりで考えていただければと思います。

#### ● 成田

あの、この会場の中にね、教育現場に関わっている方もいらっしゃるんじゃないかと思うんですけども。むしろ、そちらの方にも少し振って…。だめですか。私もかなり荷が重たすぎる部分もあるので…。

#### ● 鈴木

さすが、大臣答弁と言うことで。

#### ● 成田

いや、インタラクティブで。

#### ● 鈴木

インタラクティブ、そうですね。そういうような時間にしようと思っていましたので、もし、ご質問とか、今出て来た話に、私はこういうことをやっていて、こうだっていうことがあれば、みなさまどうですか。質問でも、何でも結構ですけれども。どうぞ、お名前を名乗っていただいて、お願いいたします。

## ●フロア1

愛知県の高校の教員で、山方と言います。シチズン・リテラシーと言うか、シティズンシップ・エデュケーションに昔から関心があったので、今日、来させてもらいました。例えば、文科省が昔、管理主義教育をして現場を締め付けて、教員は何て言うか、自由に出来ないで、画一的な教育をしてというような、管理主義教育に対する批判があったと思うんですけども。

そして今は、「総合的な学習の時間」なんですよ。教員はカリキュラム・ユーザーからカリキュラム・メーカーになれと。教科も子供の興味や関心から学習を始める。やった場合に、今までの理屈だと、教員は創造的な仕事出来る筈なんですけれども、現場はみんな嫌なんです。負担が増えて来て。私の前の学校でも、全員反対する訳ですよ。やった事にするとか、法律違反とか、どうも教員のメンタリティというか、先生に縛りがあって…。

イギリスの場合は、ナショナル・カリキュラムがなかったで、自分たちでやらなきゃいけないところがあって、教師がカリキュラム・メーカーになって進めていたところがあった。賛否両論あると思うんですけど、今は、ナショナル・カリキュラムになっちゃってね。今までなかったんですよ。日本の中にそれを単純には導入できないっていうか、教員のメンタリティというか。

シチズン・リテラシーというのは、私も非常にいいと思うんですよ。日本の中にも、昔はあったんですよ。日本の社会科教育、社会教育の分野だと、社会教育は大衆運動の、昔から市民運動や住民運動の伝統があったんですけども、だけど、現場の中には一人ではしんどいところがある。

ぜひ、今日、情報公開の話があったんですけど、学校評価と言うんですかね、学校の先生ってマネジメントが出来ないんですよ。PDCA・・・、舌を噛みそうな、校長もちんぷんかんぷんの世界です。今、ようやく中から始まったんですけども、外からもぜひ、情報公開を求めていただきたい。「総合的な学習」は、もう怪しいと思っているんです。シチズン・リテラシーをやるんだったら、「統合的な学習の時間」がいいですよ。税金の仕組みではありませんけど。ぜひ、みなさんに学校の中に中に入って来てほしいなと思っています。

## ●川北

今おっしゃったマネジメントで言うんですけど、文科省初等中等局の「学校マネジメント研修開発者会議」という、今、学校教育研修センターが展開しようとしているつまらないプログラムを作ったところ、僕がその委員になったとき、一つだけ条件を付けたことがあるんですよ。それは、「階層別研修以外の選択肢を教育委員会に与えなさい。校長、教頭というような階層別の研修じゃなくて、課題別の学校マネジメント研修を出来るようにしなさい」というのを就任の条件にしているんで、そういう事をやってもいいことになっています。

今、おっしゃっていただいたように、外部の力を使って変わっていくことも大事なんですけど、内発的な力をどれ位生かせるかということも大切で、実はあまり制度的に検討したこともなかった。つまり、森有礼さんが学校令を敷いて以来、研修とは階層別にやるものだったということを、120年間守って来たんですけども、今回の研修のスタイルでは課題別。例えば、子ども達の生きる力に関して、特定の学校で問題解決したいと思った先生達がいる、それはわが県にとって重要な課題だねとなったら、各都道府県教育委員会はそれに関する研修として、例えば校長と教育担当と学級担任がチームとして参加して、解決策を作るプログラムにしてもいい、ということも盛り込んであります。

申し上げたかったのは、外部が関わってもいいんですけども、やはり、外部の人間がほんとに継続的に関わられるかどうか。好きな事だけ言って、帰っちゃう人もいますしね。ですので、先生方にとってあまり重荷にならないように、ということから考えると、内発的に、継続的に自分たちの責任で学校を変えて行きたいって思ってる先生方がいらしゃれば、その人達が、学校の中だけで課題解決を考えないで、外の力も借りて解決するためのオフィシャルな場を、教育委員会に設けられないかな、というのが先程申し上げた制度のねらいなんです。

そういう意味では、公立の学校を一つの刺激材料として使っていただいてもいいと思うんです。どうしても、今まで学校のマネジメントという、どうやって管理するか、抑えるか、枠内でやらせるかっていう発想だったと思うんですけども、先程おっしゃっていただいた、カリキュラム・ユ

一者ではなくて、そのカリキュラムや学校をマネジメント出来る存在として、先生達を位置付けようと、文科省の方は考え始めてはいるんです。

問題は、それを通常の階層別研修をやっているだけでは、とても駄目だということです。僕は、群馬県の新任校長研修の一部を担当することになったんですが、そこではチーム制で参加することを容認するよう働きかけています。



● 鈴木  
よろしいですか。

● フロア 1  
ありがとうございます。

● 鈴木  
他にどなたかございますか。もしなければ、私の方からお聞きさせていただきたいんですが、先程、村尾さんの方から、「代表なければ課税なし」というお話があって、それが民主主義の根本だっというお話があったと思うんですけども、「模擬投票」などで子どもたちの政治意識を高める活動をしている、「ライツ」という NPO 法人の代表をされていたことのある菅さんいらっしゃいます？ぜひ、「ライツ」のお話を聞かせて下さい。

● フロア 2  
NPO 法人「ライツ」の菅と申します。よろしく申し上げます。

やはり今、川北さんがおっしゃっていた、「制度としてではなく回し方だ」という事を、改めてそうだなあと感じていました。そういう意味では、やり方にもほんとうに沢山あるんだなあと。今伺っていて、これが一つのやり方だとは私も思っていないんですけども、どうしても、民主主義教育、政治教育っていうと、こういう手法があって、ということに拘りがちなんですが、すごくアプローチは色々ある。私達の NPO でも「模擬選挙」というアプローチをやっていて、これも、ある意味では、その中の一つに位置付けられる。でも、模擬選挙という言葉で言われているその中身も、多分いろんなアプローチがある。

私達は実際の選挙に対して模擬選挙をやって、それはある意味では、投票するという行為の学習をやったんですが、この本を見ていたら逆ですね。投票される立場も体験してみようということが書いてあって、あっ、こういう事も考えられるのか…という気付きがありました。特に私の立場で言うと、選挙権と被選挙権は同じようにみなさんに保証されているながら、選挙権は一生のうちに1回くらいは行使する人はかなりいるでしょうけど、被選挙権を一生のうち1回でも行使したことのある人っていうのは、ゼロコンマ何%位でしょうから。そういう意味では、その体験というのも、同じように権利として誰にもあるわけですから、それを、カリキュラムの中でというか、そういうのも必要なんだな、ある意味では、当たり前なんだなと改めて感じさせられました。

● 鈴木

ありがとうございます。

他にいかがですか。もしなければ、あつ、じゃあ、どうぞ。

● フロア 3

横浜から来ました、ナガセと申します。横浜市で小学校の教員をやっています。

教員になってまだ1年ちょっとしか経ってないので、成田先生の名前を見た時に、僕の大学時代に絞られた、いろんな思い出を思い出してしまったんですが、もちろん、僕は優秀な有名な大学ではなかったのに、先生とはあまり関わりはなかったんですけど、どっきりとしてしまいました。

僕は小学校の教員を今やっています、身近なところから、市民教育というか、そういった学習をやっていきなと思っていました。主任がとても総合的な学習を一生懸命やって下さる方なので、例えば最近では、小学校4年生の「消防団について」の学習の際に、じゃあ折角だから消防団の人を呼ぼうよと言う話になりまして、地域の人で誰かいないかと言ったら、学校の隣のお店のおじさんが実は消防団だったんですね。そこで、呼んじゃえっていう話になって呼んだんです。そしたら、一生懸命消防団の準備をして来てくれて、消防団の恰好で来てくれたんですね。それを見て子どもたちが衝撃を受けたんです。

また、今「水の学習」をやっているんですけど、一日に2リットルのペットボトルで、何百本、何十本、何千本かなっていう位の量を消費することに気付いたりとか、横浜市では1日、学校で1カ月位、3カ月位水を使うと、東京ドーム一杯になるという話をしたりしてまして。そんな中で、じゃあちょっと、世界中では一日にどれ位の量の水が使われているか、子供と一緒に調べてみようということで調べてみたら、実は、日本ではすごく水が使えるんだけど、他の国では安全な水すら飲めない国があることがわかってきました。じゃあ、どうしようかなという事で、そんな総合にしたいなと思っていたら、子供が、「先生、国語の学習で今新聞を作っているから、新聞に載せていいですか」と言ってきました。

それで、ああすごく楽しいなと思いました。だから、僕も難しい事はよく分からないし、大学も、何て言うんですかね、とにかく、教員になれたらいいなという気持ちで行ったので、僕自身の社会性もあまりないかもしれないんですが、子ども達にそういう事を教えてもらって、身近な所からスタート出来るような学習って言うのは、どの学校にもあると思うし、すごく有名な学校だから出来るっていうわけじゃないと思うんです。一人ひとりがやって行けばいいですし、それをいろんな場所で発信して行くことが大事だと思います。そういう事が出来るようにこれから実践を積み上げて行きたいなと思いました。今日はどうもありがとうございました。

● 鈴木

ありがとうございました。素晴らしい....。

● 成田

本当にありがとうございました。

2年目ですか。確かに、こういう所に出て来た事はなかったんですが。本当に今おっしゃったところで、やっぱり、先生ご自身が楽しいとか、うれしいと思われるところは、子供もそうだと思うんだけど、先生自らがやっぱりそうですよね。私も、今までを振り返ってみると、自分自身がわくわくする事っていうか、それが本当に大事だったと思いますし、特に、今、お話があったように、外から入って来たり出て行ったりした時の、環境が変わったところで子ども達の発見があるわけで、ぜひ今後もそれを発信していかれるように、また是非、交流させていただいて、ネットワークを広げて行きたいなと思います。よろしくお願ひします。

● 鈴木

時間も時間ですけども。横江さん、もし、よろしければ、横江さんは、つい最近、アメリカの政治教育の本を新書で出されてますので、何かコメントとか、実は、そうじゃないのよっていうよ

うなお話を含めて、是非お話をいただければと思います。

●フロア4 (横江)

私は、アメリカの市民教育が日本にもあったらいいなと思って、どうやったら日本で生まれて、続いていくんだろうと考えた時に、私には、まず必要性があると感じて、アメリカではこうやっているって事が書いただけなので…。次にこの教科書(シチズン・リテラシー)が出来て、ガイドダンスがあって、そして考えていかなきゃいけないと思っているので、是非、そういう方向性になればと思っています。

一つは、今、どうしても子供に政治教育、教育って言うと、子供に考えさせる、子供を対象としたプログラムを考えている。でも、アメリカなんかを見ていても、それより以前にあったものでは、先程、先生方がおっしゃったように、急にこのような教育をやられてもできないわけですよ。そう言う事で、先生達の教育、先生達をサポートするプログラムの方が大事かもしれない。実際は、子供に対する教科書だけがあるんですが、ですから、先生達用のプログラムを、ぜひ作っていただきたいなというのが一つ。

それからもう一つは、先程おっしゃったように、中学校になると子どもは急に黙ってしまう。さつき菅さんがおっしゃったように、被選挙、自分が選挙される方になろうという教育を、アメリカもイギリスもやっています。でもそれは、全員に対してではないんです。やっぱり、ある程度の子供に対して、選ばれた子供に対してだけなんです。今、やっぱり、全員に対してって事もありますけど、先生に対する教育、それから、なんだかんだと言って全部公平、全部同じだよ、というのではなく、エリートの教育もある程度必要だと思います。

●鈴木

ありがとうございます。時間も無いようなので、最後に1分ずつの、パネリストのみなさんからのコメント、クロージングリマークをいただいて終わりにしたいと思います。打越さんの方から是非よろしくお願いします。

●打越

そうですね、私は今、小さな文庫に関わっているんです。文庫の中で子ども達にはルールを大事にさせています。人が何か喋っている時は、聴くんだよ。自分が話す時は、聴いてもらうんだから。聴くこと、話すことを大事にしようねっていうのが文庫のルールです。そして、みんなの事はみんなで決める。それから、人を馬鹿にしない、人の足を引っ張らない。まあ、そういう小さな事を、小学生が殆どなんですけども、文庫に来る子ども達に言い続けています。そんなところから、地域では何かを始めるのが大事かなっていう風に思っています。

●川北

教育ってということだけではなくて、それをどう実践してもらおうかというところも重要だな、というのがやっていてよく気がつくところなんです。今、おっしゃっていただいたような、基本的原則として、共通のルールとして守らなきゃならないことを、どう継続出来るかっていうところが、大人社会に課せられた課題であると思っています。先生方自身が使いこなせるかどうか、というところも含めて、民主主義教育って事を言っている側の教育も、進めていきたいと思っています。

●成田

私、今日の話を通して、かなり大きな課題を背負って来たなという感じがするんです。実際に今、みなさんの話を聞いてましてですね、私達が今この学校の中から出ていく事と、それから、迎える事の具体的な場面を、教室の外へ求めていくことが大切だなあと感じています。例えば、先程話しました、ディベートといったかたちで討議する場面でも、環境活動の現場に行くと、その場で市民の方や、あるいは担当しているゴミ焼却場の方と共にですね、その場面を共有するみたいな、そういったスタイルっていうのは非常にこう大事になってくるのかなあと感じています。

私は実は、この8月にですね、「こども国連環境会議推進協会」というところで、いわゆる環境に関する活動を支援することに携わりまして。地域や学校や家庭がどういう風に繋がって行くのか。そこでは従来から、環境省の関わりとか、環境教育って狭い部分があるんですけども、そうじゃなくて、様々なアプローチ、環境、安全環境をどう作るのかという事も繋げていくという、そういう意味では、まさに、包括的な議論のできる場面を作っていく、あるいは、参加して行くことが非常に必要なのかなあと。

それで、先程お話のありました、教員のサポートっていうことですが、それは実際にそういう足跡って言いますかね、カリキュラムや計画があります。実際に歩いた後に、カリキュラムが出て来ると思いますよね。我々はどういう風に歩いて行った跡を残していくのか、あるいは、それを共有できるのかって事が非常に大事になっていく風に思っております。ほんとうに今日は貴重な時間をいただきありがとうございました。

#### ● 村尾

私、聞いていて、特に、会場の方からの質問の中にあつた、学校の先生方の問題意識というのが、非常に参考になりました。私はあまり教育の事については専門家ではないんですが、学校にどんどん外部の目を取り入れた方がいいっていうような事をおっしゃられたことは、非常に私は新鮮な気持ちで受け止めています。むしろ、そういう方に一度質問したいと思っていたんですが、学校の選択制っていう、納税者や住民が直接学校を評価し、先生を評価するという事に関して、先生方ってどういう風に考えておられるのかなあとということなんです。先程、プラン・ドゥ・シー・チェックというか、行政評価の話もしましたが、それは所詮、行政サイドの供給者同士でやる評価であつて、本来の費用負担者である納税者が学校を評価する、先生を評価するといった、違う意味で言えば、学校選択制という事に対しては、現場の先生方はどういう事を考えておられるのかなあつてこともですね、一度私訊きたいなと思っていました。

私はマーケットって言うのは、ある意味では、擬似民主主義だと思っています。我々は日々、お金を払うという行為を通じて、日銀券と言う投票用紙を使って、どの企業がいいのか、どの企業が悪いのか、どのサービスがいいのかという事を、投票しているって事になるわけですね。それは、社会の在り方、企業の在り方を、正に、消費者主権という言葉があるように、消費者の側から見っていくのであつて。その一つの典型が学校選択制だと思いますけれども。そういう議論について先生方がどう思っているのかということ、一度是非ですね、お寿司をご馳走する訳じゃないですが、お聞きしたいなという風に思いました。



## ● 鈴木

今日は、いろいろな意見が出ましたけれども、私は、今日の結論があるとは思えませんし、扱わせていただいた課題もすごく大きいのに、これだけの数のみなさんが、特に、金曜の夜に、プライベートなことを犠牲にして来ていただいて、大変感謝申し上げます。

それと、会う方々やメールなどを通じてみなさまに申し上げるんですけども、今年は、日露戦争が終結して100年なんです。日露戦争と言うのは、ご存知のように日本を帝国主義に駆り立てたわけです。それと、戦後民主主義が始まって60年、それから、いわゆる「55年体制」が出来て50年とかですね、あと、細川政権が出来て政権交代らしきものが起きて12年とかですね、そういったものすごいタイミングの時なんです。そういう意味では、今年は、日本の民主主義とか、民主主義の制度とか、それをやり始めていくためのこのような「シチズン・リテラシー」とか、政治教育、市民教育といったものを考えていく「キック・オフ」の、非常にいいタイミングだと思うんですね。そういう意味では、今日、結論を出さなかったっていうのは、私の責任でありますけれども、是非、みなさんで持ち帰って議論を続けていただき、実際の、みなさま方が活躍されている現場で広げて行っていただきたいなという風に思っています。

今日は、「民主主義」というテーマを扱った会合ですが、なかなかこういう所で話してくださいと言っても、シャイな方が日本には多いわけですから、大久保さんの方からお話があると思いますけれども、二次会と言うか、懇親会がありますので、今日のパネリストの方も多くの方に残っていただけたと思いますので、是非、直接にお話ししていただいて、より多くのものを持ち帰っていただければと思っております。

それでは、本日パネラーをやっていただいた方々に 是非、みなさま大きな拍手をお願いします。

## ● 大久保

鈴木先生ありがとうございました。パネラーのみなさまもありがとうございました。参加して下さいましたみなさまも、お忙しいなか本当にありがとうございました。私自身、実はですね、教育学部を出まして、しかも教育学部しかない大学を出たんですね。それで教員にならなかったというのは、やっぱり理由があるんですが、なかなか言えないものですが、社会の問題をどう解決するかということがありました。

その一つとして、教育を考えて、教員養成大学には行ったんですけども、それだけで解決できそうにない。でも、逆に、政策を作るだけでほんとうに社会がよくなるのか、ということについてもなんとも言えないところがあって、私にはその間をどうにか繋がなきゃいけないという使命感がありました。一時、教壇に立っていたんですけども、その後、検定教科書を作る会社に入りまして、なんとか、違った形から教育を見ていきたいと思っていました。教科書がなぜつまらないかについては、ここではなかなか言えないこともありますので、その話は二次会でお話しますけれども……。それでもどうしても我慢しきれなくなって、今度は政策を学ぼうということで、講演会や勉強会に出席して、鈴木先生とお会いする機会にもなったのですが、どうしてもそれだけでは満たされなくなって、今年からはとうとう大学院に入って、政策科学を研究することになったのです。

今、公教育の在り方そのものが、問題に直面していると思います。例えば、ビジネスマンを育てるだけの教育であれば、多分、学校選択とか、習熟度別学習とか、そういった事をしていって、どんどん人を選別していけばいい、お金を払って、お金がある人達はみんなどんどん優秀になればいいっていう風になるんですね。でも、国民の税金を使って、公教育をどうしていくべきか、といった事は多分、教員の立場だけではどうしても言えないし、私はどうしてもその間を繋げていかないとと思っています。私だけが考えるのではなく、このシチズンシップ教育推進ネットという形で、みなさまを勝手にメンバーにしていますけれども、一緒に考えていかないといけない時代が来ているんですね。編集者として他社の本を紹介するのは気が引けますが、最近、藤原和博さんが『公教育の未来』と言う本を出しています。そこで、やはり、「よのなか」科は市民教育である事をはっきり言っています。それまでは、やはりいろいろな立場上、時流を、様子を見て「市民」と言う言葉をあまり使わないようしていたのだと私は思います。

ここではっきり言えるのは、総合学習であれ、社会科教育であれ、それだけではなく、理科、数

学，その他の教科についても，社会の問題を解決するために公教育があると思うんですね。私は，実は数学の教師で，数学の専攻，数学教育の専攻なのですけれども，グラフを読む力とか，統計を読む力，社会調査をする力というのは，ほんとうに市民として必要なんですね。「自ら考える力」というものを養成したいと思っていたので，そのような立場に立っていますが，それは社会科教育などにも当然あるもので，それを横割りして一回整理し直さないと，自分達が何のために学んでいるのか，それどころか，何のために生きているのか分からないともなりかねない。ただ，勉強しているだけだったら，それは生きていることに向き合っていることにはならない，といえると思うんですね。そういったところを，ただ，「今ここで呼吸している」だけではなくて，一緒に考えていっていただきたいと私は思います。

後は事務的なお話ですけれども，お手元にアンケートがあります。ほんとうのみなさまの思いの丈をお聞かせいただきたいと存じます。NPO と言うのはいろんな手が使えます。このみなさまのご意見を聞かせていただいたものを，例えば，文部科学省にぶつける事も出来ます。そうしたのも民主主義の一つだと思います。どんどん書いていただいたものを，社会に提言，政府に提言していきたいと思っております。このアンケート書ききれなければ，裏に書いてもかまいませんし，ご自宅にお帰りになってメールで送っていただいても構いませんので，ぜひご意見をお寄せ下さい。

それから，このあと二次会がございます。会場は，隣の棟に宿泊棟という棟がいくつかあるんですが，その中のD棟の9階「さくら」というレストランです。もしかしたら地図をもらっていたかと思いますが，お申し込みがまだの方も受付に言っていただければ，まだ，若干余裕がございますので，ぜひこの続きをお話できればと思います。今日は本当にお忙しい中ありがとうございました。(完)

「市民」を楽しみ、市民性を育もう！

[www.citizenship.jp](http://www.citizenship.jp)

シティズンシップ教育推進ネット 主催  
『シチズン・リテラシー』出版記念シンポジウム

「ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて  
民主主義と教育、公共、個人について考える。  
『シチズン・リテラシー』出版をとおして」



## シチズン・リテラシー

～社会をよりよくするために私たちにできること～

日本は、政治や政策、法律などがなかなか身近なもの、自分の生活と密着したものとしては感じられない社会です。それは、社会や民主主義のあり方、そこにおける市民の役割などについて、現実をふまえながらその基本的かつ根本的なことを具体的に学んだり、考えたりする機会が不足しているからではないでしょうか。

欧米や新しく民主化した東中欧の国々やアフリカなどでは、「市民としての十分な役割を果たし得るような知識・態度・スキルを体得するための教育」として市民教育や政治教育が体系的に行われてきています。

また、アメリカにはアメリカン・デモクラシー（アメリカ型民主主義）、英国にはブリティッシュ・デモクラシー（英国型民主主義）の土台と社会的蓄積があります。ところが、日本では「ジャパニーズ・デモクラシー（日本型民主主義）」というものの具体的な経験や知見の蓄積があまりないように感じます。

今回のシンポジウムでは、日本の民主主義社会やそこでの市民の役割、市民のリテラシー、それを身に付けるための教育について、みなさまと一緒に考えていきます。

## 1. 日本におけるパブリックを考えよう

## 1-1 私たちとシチズン・リテラシー

- ・個人としての私（あなた）、市民、社会
- ・よりよい民主的な社会をめざして
- ・みんなでつくる社会
- ・チェック・アンド・バランス
- ・よりよい社会のための「パブリック」

## 2. 日本人にとっての市民と民主主義を考えよう

## 2-1 日本人にとっての市民と民主主義を考えよう

- ・誇り高さ「一市民」として
- ・デモクラシーの教育
- ・アメリカの大統領選挙
- ・愛国者としての市民
- ・政策と市民
- ・市民による市民教育（ノンプロフィット・セクター）
- ・市民と選挙権
- ・アメリカン・デモクラシーの度合い
- ・大統領選挙と市民教育
- ・日本の可能性（21世紀の世界に貢献する市民として）

## 3. 世界、国、社会について理解を深めよう

## 3-1 世界、国、コミュニティとその成り立ち

- (1) 多文化・多民族市民、地球市民から社会について考える
- Action1 「100人村」のワークショップ
- (2) ケータイを通じた経済から社会について考える
- Action2 「ちがいのちがいの」のワークショップ
- (3) お金と政治から社会について考える
- Action3 様々な問題を「地固化」してみよう

## 3-2 社会のビジョン（理念）の共有と、制度について

- ・憲法・立法・行政・政府・司法の役割についての理解
- Action4 まちを歩いて「夢マップ」をつくろう
- ・法制度に関する理解
- Action5 模擬裁判をやってみよう
- ・その他の分野における社会のビジョンの共有
- ・情報公開の重要性

## 3-3 社会に参画するアクターについて理解を深めよう

- ・私たちの生活を支える様々なアクター
- Action6 地域住民（NPO法人）による学校教育への参加事例
- ・社会の合意形成と多元主義
- Action7 政治家や政党の活動を調べてみよう
- Action8 新聞社に意見を送ってみよう／自分で取材してみよう

## 4. 私、市民、共同体の間で「つながり」を考えよう

## 4-1 税金から考えよう（経済や財政システム）

- ・政府が組織される理由
- ・税金のしくみ
- ・納税の義務（なぜ私たちは税金を納めるのか？）
- Column（現場の声）1 税に関わる人々
- ・税政の現状と課題

#### 4-2 選挙から考えよう（政治システム）

- ・投票へ行こうー選挙って何だ！ー
- ・投票率（あなたの大切な一票）
- ・”代議士は、国民の代表である”
- ・政策・人物・政党
- ・マニフェスト（政権公約）
- ・テレビ政治の課題
- ・政治家のリクルートメント
- ・定数削減
- ・多選禁止ー長いものに巻かれるの政治風土ー
- ・一票の重さと軽さ（格差）
- ・日本型政治風土ー利益誘導ー
- ・”一票での政治浄化”ー尾崎行雄の政治理念ー
- ・パフォーマンスより政策、政策より結果
- ・有権者は納税者
- ・政治家のレベルは、有権者のレベルの反映である

Column（現場の声）2 選挙に関わる人々

#### 4-3 裁判員制度から考えよう（司法システム）

- ・裁判について考えてみよう
- ・日本と外国の司法制度の違い
- ・裁判員制度の導入
- ・裁判員制度のしくみ
- ・名簿登載の通知がきたら
- ・裁判員候補者として裁判所に呼ばれたら
- ・あなたか裁判員になったら
- ・裁判員制度への期待と課題

Column（現場の声）3 裁判員制度の実施へ向けての工夫

#### 4-4 NPO/NGOから考えよう（社会システム）

- ・社会への参加は、市民の責任と権利
- ・個人としてのボランティアから継続的な組織としてのNPOへ
- ・自発性、柔軟性は高いが、財政的には不安定なNPO
- ・市民が市民を信頼し、ともに行動する社会へ

Column（現場の声）4 NPOに関わる人々

#### 4-5 コミュニティと国際機関から考えよう

##### (1) コミュニティから社会を考える

- ・グローバルな時代での国の影響力の低下
- ・悩みを抱える地方自治体
- ・都市化で切断された「つながり」
- ・地域コミュニティとは何か？
- ・コミュニティを活性化しよう
- ・パートナーシップのネットワーク

##### (2) 国際的・グローバルなシステム

- ・「グローバル化」と私たち
- ・地球益を達成するためのグローバルなシステム
- ・ローカル、ナショナル、グローバルな存在としての市民

Column 1 産官学連携を通じてのコミュニティの可能性

Column（現場の声）5 NGOや国際機関で活動する人々

### 5. 自ら考え、発言・行動を起こそう

#### 5-1 自ら考えよう

- ・意見をもつことと考えること
- ・論理的に考えること
- ・コミュニケーションの素養
- ・調査する能力
- ・法律を読む力
- ・社会調査に対する感覚を磨くこと
- ・メディアの視点
- ・権力者や既得権保持者の視点
- ・公益性を増進する発想

#### 5-2 行動を起こそう

- ・行動を起こす前に、まずは「調べる」ことから
- ・これまでの制度を活用して、議会や行政などを動かそう
- ・新しいしくみとして、自分たちで起業しよう
- Action 9 視点をかえて模擬裁判をしてみよう
- Action 10 納めている税金はいくら？
- Action 11 議会と行政と税金について考える
- Action 12 裁判ウォッチングに行こう
- Action 13 情報公開制度を利用してみよう
- Column 2 市民が政策をつくり提言する時代
- Action 14 政策案をつくってみよう
- Action 15 政策提言を書こう
- Action 16 政策案を実現する方法を考えよう

## シンポジウムパネラー紹介

\*コーディネーター

■鈴木崇弘(すずきたかひろ)

宇都宮市生まれ。東京大学法学部卒、マラヤ大学、イーストウエストセンター奨学生として同センター及びハワイ大学大学院などに留学。東京財団研究事業部部長、大阪大学特任教授などの勤務を経て、現在シンクタンクの設定に参画。主な著訳書(含共著)は『世界のシンク・タンク』、『アメリカに学ぶ市民が政治を動かす方法』など。

『シチズン・リテラシー』では「1日本におけるパブリックを考えよう」を担当、また全体編集も手がける。

【現在の主な活動】現在、政党のシンクタンク設立に向けて活動中。日本に「民主主義を起業する」がライフワークテーマ。

---

\*パネラー

■村尾信尚(むらおのぶたか)

岐阜県生まれ。一橋大学経済学部卒業。大蔵省入省後、三重県総務部長、大蔵省主計局主計官、財務省理財局国債課長などを歴任。現在、関西学院大学教授。著書は『「行政」を変える!』(講談社現代新書)など。

『シチズン・リテラシー』では、「4-1税金から考えよう(経済や財政システム)」を担当。

【現在の主な活動】関西学院大学では、東京オフィスを活動の拠点にして、市民の皆さんと幅広いネットワークを形成しながら、政策提言・教育研究・情報発信をしている。また、2003年11月に結成した「もうひとつの日本を考える会」においても、私たちの生活に身近な政策提言を行なっている。

---

■成田喜一郎(なりたきいちろう)

東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。現在、東京学芸大学附属大泉中学校副校長、中央大学兼任講師。主な編・著書は、『世界と対話することもたち』(創友社)、『中学校社会科授業ディベートの理論と方法』(明治図書)、『必携!教師のための個人情報保護実践マニュアル』(教育出版)など。

『シチズン・リテラシー』では、「3-1(2)ケータイを通じた経済から社会について考える」、Action3「様々な問題を『地図化』してみよう」、Action9「視点をかえて模擬選挙をしてみよう」、Action12「裁判ウォッチングに行こう」を担当。

【現在の主な活動】現在、学校得運営・教育研究活動のほか、シンガーソングライター「寺澤満春」の名で、中高年のためのライブコンサートや高齢者への出前ライブなど、歌とギターによる非営利市民活動を展開中。1960～70代のフォークソング・ポップス、自作の「風と湖水と人々と」「ときのみほろば」「水よ、すべての人たちに」「天空に響くヒマラヤの笛」などを演奏。

---

■川北秀人(かわきたひでと)

大阪府生まれ。京都大学経済学部卒業。(株)リクルート、国際青年交流NGOの日本代表、国会議員の政策担当スタッフなどを務め、IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]代表者。

著書は『市民組織運営の基礎』(IIHOE発行)など。

『シチズン・リテラシー』では、「4-4NPO/NGOから考えよう(社会システム)」と「5-2行動を起こそう」を担当。

【現在の主な活動】隔月刊誌「NPOマネジメント」を編集・発行(1999年6月創刊)。NPOや社会責任・貢献志向の企業のマネジメント、環境・社会コミュニケーションの推進を支援するほか、最近NPOとの協働に関する自治体からの職員研修の依頼も多い。その他、(特)JEN共同代表理事、(財)日本自然保護協会評議員、(社)ガールスカウト日本連盟評議員なども務める。

---

■打越紀子(うちこしのりこ)

東京都生まれ。青山学院大学女子短期大学家政学科卒業。埼玉県北足立郡吹上町議会議員2期を経て、現在、表現教室主宰、東京新聞市民レポーター。著書は『おやつの時間だよ～はつらつママの議員な生活』(新風舎)。

『シチズン・リテラシー』では、Action10「納めている税金はいくら?」、Action11「議会と行政と税金について考えよう」、Action13「情報公開制度を利用してみよう」を担当。

【現在の主な活動】2002年に設立した「吹上町民オンブズマン」で、市民が行財政を学び、チェックし、提言していく活動を継続している。最近、吹上町がこの10月に合併する相手市町の情報を収集して、あきれような補助金を発見し、さらに調査中。地域の子ども文庫では「歌のお母さん」として、ミニコンサートの合間に、税金や選挙、民主主義の話を織り交ぜて歌っている。

## [参考]シチズン・リテラシー執筆者紹介(2005年3月現在)

### ■上野真城子(うえのまきこ)

東京都生まれ。東京大学大学院修了工学博士。アーバン・インスティテュート(ワシントンDC) 研究員から、現在、大阪大学特任教授。米国在住。WJWN代表、JACF(米国NPO)理事。専門は施策研究。訳書に『政策評価入門』(東洋経済新報社)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[2-1].

### ■風巻浩(かざまきひろし)

神奈川県生まれ。慶應義塾大学卒業。成城大学大学院文学研究科修了。現在、神奈川県立麻生高等学校教員(世界史)。開発教育協会理事。かながわ開発教育センター理事。著書に『ボランティアで国際交流』(岩崎書店、共著)。『シチズン・リテラシー』の担当:[3-1(1)、Action①②]

### ■中林美恵子(なかばやしみえこ)

埼玉県生まれ。ワシントン州立大学大学院卒。米国家公務員(上院予算委員会補佐官)を経て、現在、(独)経済産業研究所研究員、CS衛星放送「ニュースの深層」キャスター。著作に『日本の財政改革』(東洋経済新報社、共著)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[3-2]

### ■福岡政行(ふくおかまさゆき)

東京都生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。明治学院大学、駒沢大学を経て、現在、白鷗大学法学部教授、立命館大学客員教授。著書に『日本の選挙』(早稲田大学出版部)、『十年後ニッポン』(講談社)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[4-2]

### ■細野助博(ほそのすけひろ)

筑波大学大学院社会工学研究科博士課程修了。現在、中央大学評議員、教授。日本公共政策学会会長。著書に、『実践コミュニティービジネス』(中央大学出版部、監修/共著)、『スマートコミュニティ』(中央大学出版部)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[4-5(1)、Column①]

### ■島広樹(しまひろき)

京都府生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業、同大学院政策・メディア研究科修士課程修了、同博士課程単位取得退学。フジタ未来経営研究所を経て、現在、大阪大学フロンティア研究機構特任教員。『シチズン・リテラシー』の担当:[5-1、Column(現場の声)①②④]

### ■油木清明(あぶらききよあき)

石川県生まれ。慶應義塾大学にて経済学学士、マサチューセッツ工科大学にて政治学修士を取得。現在、日本経団連政治グループ副長。著書に『技術立国再び—モノ作り日本の競争力基盤』(NTT出版)がある。『シチズン・リテラシー』の担当:[3-1(3)]

■大久保正弘(おおくぼまさひろ)

東京都多摩市で育つ。東京学芸大学教育学部卒業。予備校講師を経て、現在、編集者。シチズンシップ教育推進ネット代表(<http://www.citizenship.jp/>)。執筆に「シチズンシップ教育推進ネットの提案」『社会科教育』(2005年1月号pp.30-32、明治図書)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[Action④⑭⑮⑯、Column②]

■高乗秀明(たかのりひであき)

京都市生まれ。京都教育大学卒業。公立学校教諭、京都教育大学附属京都中学校教諭、同副校長を経て、現在、京都教育大学附属教育実践総合センター助教授。著書に『コミュニケーションとメディアを生かした授業』(日本文教出版)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[3-3]

■所夏目(ところなつめ)

広島県生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。新宿区立淀橋第四小学校、板橋区立蓮根小学校を経て、現在、三鷹市立第四小学校教諭。『子どもの夢を育むコミュニティスクール』(教育出版、貝ノ瀬滋編著)に執筆。『シチズン・リテラシー』の担当:[Action⑥]

■北郷美由紀(ほくごう みゆき)

千葉市生まれ。津田塾大学卒業。英・バーミンガム大学国際関係学修士課程修了。1991年から朝日新聞記者。政治部、インドネシア特派員などを経て、現在、企画報道部。著書に『この地球で私が生きる場所』(平凡社、共著)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[Action⑦⑧]

■東恭弘(ひがしやすひろ)

三重県生まれ。駒沢大学法学部卒業。ラジオ番組取材スタッフ、衆議院議員秘書を経て、現在、福岡政行政事務所。『シチズン・リテラシー』の担当:[4-2脚注]

■原啓一郎(はらけいいちろう)

愛知県生まれ。東京大学法学部卒業。現在、札幌地方裁判所部総括判事。著書に『法律知識ライブラリー7・民事執行の基礎と応用〔補訂増補〕』(青林書院、共著)など。『シチズン・リテラシー』の担当:[4-3、Action⑤、Column(現場の声)③]

■和栗百恵(わぐりももえ)

石川県生まれ。中央大学総合政策学部卒業。スタンフォード大学教育研究科国際比較教育修士。スリランカや日本のNGOを経て、現在、中央大学総合政策学部特任講師(<http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~iip/>)。『シチズン・リテラシー』の担当:[4-5(2)、Column(現場の声)⑤]

6/17 シティズンシップ教育推進ネット主催シンポジウム アンケート集約

「ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて民主主義と教育、公共、個人について考える。

『シチズン・リテラシー』出版をとおして」

●回収21枚（参加者約80名中）

●今回のシンポジウムに満足していますか。

- ・「はい」19
- ・「いいえ」1
- ・無回答1

●市民教育や民主主義に対する理解が深まりましたか。

- ・「はい」18
- ・「いいえ」1
- ・無回答1
- ・「はい」「いいえ」の中間 1（「時間が短いのが残念でした。」）

●今後このようなイベントに参加したいですか。

- ・「はい」20
- ・「いいえ」0
- ・無回答1

（以下 自由記述欄の回答：掲載許可をいただいているもの）

●当会对する今後のご期待・ご希望をお聞かせ下さい。

- ・学校教員をどうかしていくか。小学校などの学習を。
- ・この本を活用したワークショップに参加してみたい。
- ・愛知県から来ました。地域で協力しあえるネットワークを持ちたい。
- ・本日はあくまでも KICK OFF かと思います。本当に社会の中で機能する形になる様な会になる事を期待しています。
- ・学校での市民教育だけではなく、NPO活動としてどう展開するか。
- ・地域で市民活動、まちづくりなどを実践・活動している方々の話
- ・日本社会と在日朝鮮、韓国人や、在日外国人社会との共生にとりくむ在日韓国、朝鮮人の日本人の地域ファシリテーター、学校教育者の方々のお話。

●子どもたちの市民性を育むために、何をしたらよいと思いますか。また、何をしたいですか。

- ・教育全体のマネジメントシステム改革について、トータルに考え提案していきたいと思います。
- ・政策提言コンテスト
- ・総合的な学習の時間をしっかりとやりたい。
- ・せっかく、今、小中学校に、総合学習という時間があるのだから、その時間を有効に使い、身近なところから、物事を考えさせることが大切。どんな事も、「やらなければいけない」よりも「やりつづけること」を教えればいい。
- ・色んな意味で現場を見せてあげたり、実際に小さな体験をさせてあげるチャンスを多く持たせてあげてはいかがでしょうか。
- ・子どもの親に対する教育
- ・核家族化や、地域のつながりが薄くなった地域社会で地域に開かれた学校
- ・より身近な所、家庭レベルから政治や経済など世界とのつながりを自分で納得いくまで調べたりなどさせてあげる。その際、生徒から求められる以外のサポートはしない。（余計な世話をしない）
- ・多文化共生について、子どもの理解を促進する教育をこれからどんどんやって下さい。

## ●感想

- ・小学校教育には、市民性を養う学習内容がたくさんあると思います。ただ、そうした視点をもつことが必要であり、実践をつなげていきたいと考えています。
- ・Japanese Democracy と言うには、日本的なものの紹介がなく、違和感を覚える人もいるのではないかと。日本的なものの文献等は少ないとのことですが、そこを克服していかないと、Japanese Democracy は描けないように思います。
- ・自分は実践的な経世済民教育を受けた経験がありません。今の多くの生徒・学生も受験勉強中心でそうではないでしょうか？
- ・大人が学ぶ機会も増やせるよう努力したいと思います。  
どういう場になるかわからずに来ました。学校教育には最近まで本当は何にも期待されず、選別だけ、ひどい時は模試のための授業しか期待されず、「市民」教育は企業が受けもつとされていたのではないだろうか。「市民」といっても組織人。現場でもこの不況下組織に適応できる二重対策。戦略をもって教育、社会を変えたい。
- ・今まで私たちの教えられていた「民主主義」の概念は、「きまり」や「事実」でした。しかし、今日ここで話を聞いてみて本を読んでみて、「やり方」や「結果」なのだということがわかりました。
- ・今回このシンポジウムに参加して、パネラーの先生方のお話やその他の方々のいろいろな話が聞けてとても勉強になりました。
- ・教育として根付かせることの重要性は良くわかった。おそらくそれらを受けた子供らの世代は有望かもしれない。
- ・教育として受けなかった既に社会とのしがらみを持った市民はどう学んで実践していけば良いのか、今の自分の課題だと感じた。
- ・今回参加させていただいて、いろんな入り口が開かれたような気がします。より興味が深まりましたし、シチズン・リテラシーが、どこにどう必要、なぜ必要なのか理解できました。
- ・制度ではなく役割や納得といったプロセスを重視するデモクラシー学習の重要性を理解した。

# シチズン・リテラシー

社会をよりよくするために私たちにできること

A 5 判・216ページ・並製/定価1,995円(税込)

市民の社会参加の分野に明るい、著名な編集委員による執筆!!

鈴木崇弘(大阪大学特任教授) / 上野真城子(大阪大学特任教授) / 風巻浩(神奈川県立麻生高等学校教員) / 成田喜一郎(東京学芸大学附属大泉中学校副校長) / 中林美恵子(経済産業研究所研究員、ニュースキャスター) / 村尾信尚(関西学院大学教授) / 福岡政行(白鷗大学法学部教授、立命館大学客員教授) / 川北秀人(HHOE[人と組織と地球のための国際研究所]代表者) / 細野助博(中央大学評議員、教授) / 烏広樹(大阪大学フロンティア研究機構特任教員)



★なぜ国や政治家にまかせきりではなく、自分たちで社会をつくらなければならないのか? なぜ選挙に行くのか? なぜ税金を払うのか?...などの疑問の解決から、身近な地域社会への参加・まちづくり・NPO活動や政策提言などの方法までをわかりやすく解説。

★海外の教科書なども参考に、「官から民へ」の時代、私たち自身が社会に参加し社会をよりよくする方法を示した、日本初の市民のための教科書。

★写真や図解・脚注入りでわかりやすい文章。

★すぐにアクションが起こせるよう、実践に必要な方法やワークショップを丁寧に紹介。

NPO活動・ボランティアなどにも役立つ市民必携の書!!

## 注文書

シチズン・リテラシー 社会をよりよくするために私たちにできること  
定価1,995円(税込) \_\_\_\_\_冊 C0037 ISBN4-316-80106-6

◆お名前

◆ご住所

◆お電話

お取り扱い店

教育出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>  
TEL 03(3238)6965 FAX 03(3238)6999 E-mail [hshuppan@kyoiku-shuppan.co.jp](mailto:hshuppan@kyoiku-shuppan.co.jp)

「市民」を楽しみ、「市民性」を育くもう！

# シティズンシップ教育推進ネット



<http://www.citizenship.jp/>

## ■シティズンシップ教育とは

### 1. 導入の背景

「カベの落書き」「ゴミのポイ捨て」「駅前自転車の氾濫」「地域コミュニティの衰退」「犯罪の増加」・・・などといった、社会問題が増加する一方で、「投票率の低下」「政治的無関心」「社会的無力感」といわれるように問題を傍観する冷ややかなムードが蔓延しています。このような社会問題に対して、我々になすすべはないのでしょうか。今、ひとりひとりの市民としてのあり方・行動様式（シティズンシップ）が、改めて問われています。

### 2. イギリスのシティズンシップ教育

イギリスでは、このようにめまぐるしく変化する現代社会において、子どもたちが将来、市民としての十分な役割を果たし得るよう、知識・態度・スキルを体得させるための教育として、シティズンシップ教育を2002年に中等教育の必修カリキュラムに導入しました。

諮問委員会の委員長バーナード・クリック氏は、実践課題として、「社会的・倫理的責任」「コミュニティとの関わり」「ポリティカル・リテラシー」の3つのキーワードをあげています。

### シティズンシップ教育導入の背景



#### ○シティズンシップ教育の目的

「子どもたちが、参加型民主主義を理解・実践するために必要な知識・スキル・価値観を身につけ、行動的な市民となること」

#### ○実践課題3つのキーワード

- 「社会的・倫理的責任」
- 「コミュニティとの関わり」
- 「ポリティカル・リテラシー」

出典：『学校における、シティズンシップと民主主義教育のための教育：シティズンシップについての諮問委員会最終答申』（1998年9月）



たとえば、壁の落書きを見て、その原因や、このことがもたらす結果、誰が損失を被るのか・・・といった社会全体の問題解決に対する意識を育みます。

また、肌の色の違う二人の子どもの写真から、差異や多様性について話し合い、共生について考える事例もあります。

法や制度や社会の仕組みなど、市民が身につけておくべき素養をたんに受動的に学ぶだけではなく、それをもとに考えたり、実際に行動してみて“参加のスキル”を高めます。

### 3. 21世紀の参加型民主主義社会の学びへ

いままでの日本の公民教育は、民主主義の手続き、法、社会組織の構造などの知識に偏っていました。これからは、一人一人が社会的主体として想いを反映させ、実際に行動し、問題を解決していく「動」的な学習へと変えなければいけません。私たちは、地域社会の中で課題を発見し、行動する学習を通して、市民参加型の民主主義社会の担い手を育成していきます。



## ■シティズンシップ教育推進ネットの活動

### 0. ミッション

**ビジョン:**「子どもたち・大人たちが、参加型民主主義を理解・実践するために必要な知識・スキル・価値観を身につけ、行動的な市民となること」

**ミッション:** 私たちは、上記のビジョンの達成にむけて、「市民性＝シティズンシップ」を育むための場づくり、ネットワーク（関係）づくり、コンテンツ（中身）づくりを推進します。

### 1. 人材の育成

ワークショップを実施するなかで、ファシリテーター（ワークショップの推進役）を育成していきます。また、全国の教師・ファシリテーター・市民講師・地域アニメーターをつなぐネットワークをつくりまします。

### 2. 知識・情報の収集・発信

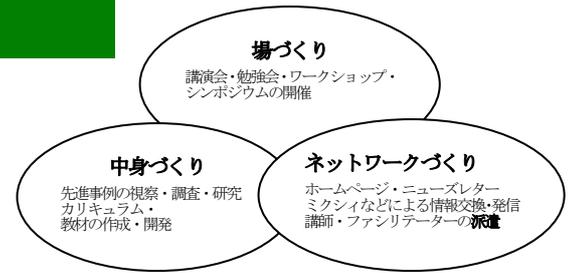
先進事例を取材し、ホームページやニューズレター・出版などによって、全国へ広げていきます。また、シンポジウムの企画・開催も進めていきます。同時に派遣講師のデータベースづくりを進めます。

### 3. 学校教育の支援・生涯学習の展開

小・中・高校の総合的な学習への市民講師の派遣、土日講座の開催などにより、ワークショップの学びの場をつくりまします。大人を教育現場に送り、一緒にまちづくりを学ぶことは、成人教育としての効果も期待できますし、地域のつながりも広がります。

### 4. シンクタンク機能

日本型シティズンシップ教育のためのカリキュラムや教材の開発・研究を進めます。また、教育のプロと政策・法曹のプロなどが手を結んで、学びの場を創造します。市民運動家・政治家・教育者・一般市民・金融・経営のプロなど、様々な分野の方が参画しています。



## ■ワークショップ まちづくり・環境・国際理解・福祉・共生など

市民生活の基礎的部分から、社会の成り立ちや実際的な市民活動へと順を追って学びます。

壁の落書きを消すこと、ゴミの分別をすることなど市民生活の身近なところから、行政や住民の負担するコストを考えたり、政策の立案をしたり、ボランティアの意義について考えていきます。

### 1. まちづくりワークショップ

まちを歩き、良いところ（お宝くん）、悪いところ（困ったくん）を見つけ、地図に記録していきます。模造紙にまとめ、「お宝くん・困ったくんマップ」や、お宝くん・困ったくんを分類した「分類図」をつくりまします。この活動から、地域の良さ・悪さの代表イメージが浮き上がってきます。

そこから、ブレインストーミングをしたり、話し合ったりした上で、「夢図（構想図）」をつくり、発表していきます。知らなかったまちが、見えてきます。まちが好きになります。市民であることが楽しくなります。

### 2. 川づくりワークショップ

川を歩き、水質を調べたり、まちづくりにつなげたり、川と親しみ、まちを楽しむワークショップです。三面コンクリート張りの川、生活排水が流れ込むだけの川、かつて生活と密着し、飲み水としても使われたり、泳いだりした川が、今は…。 私たちに身近な川づくりを進めることで、シティズンシップを育みます。



### 3. 政策立案・立法理解ワークショップ

身近な問題を取り上げ、それをもとに政策をつくり、提案の仕方を考えるワークショップです。立法過程の理解、条例立案の方法などについても考えまします。

### 4. マニフェスト作成・評価ワークショップ

ローカル・マニフェスト（地方選挙）や、パーティ・マニフェスト（国政）を作成したり、評価するワークショップです。政治との継続的な関わり方を学び、積極的な市民としての知識・理解・態度を育みます。



顧問 鈴木 崇弘 中央大学大学院公共政策研究科  
客員教授  
長沼 豊 学習院大学助教授

アドバイザー 片山 善博 鳥取県知事



**シティズンシップ教育推進ネットメールマガジン**  
配信中です！

シティズンシップ教育をはじめ、各国の市民教育・  
公民教育の情報をお伝えしています。

購読方法は、**<http://www.citizenship.jp/>**

をご覧ください。

### **シティズンシップ教育推進ネット**

〒194-0215 東京都町田市小山ヶ丘4-7-2-818

代表 大久保 正弘

**URL: <http://www.citizenship.jp/>**

**E-mail: [office@citizenship.jp](mailto:office@citizenship.jp)**

## シティズンシップ教育推進ネット 入会のご案内

シティズンシップ教育推進ネットでは、メールマガジンによる情報発信をしています。また、ML会員および、一緒に活動して下さるスタッフを募集しています。下記の事務局までご連絡ください。

### □メールマガジン講読

各国の市民教育・公民教育の動向、まちづくり・くにづくり・ひとづくりの活動など、さまざまな情報をお送りしています。(第1回は、鳥取県知事 片山善博氏のお話を掲載しました。)

### □ML会員

メールリングリストを使用したメールによる情報交換の場です。イベントのご案内もしております。

### □運営スタッフ・ボランティア・講師

運営のお手伝いをしてくださる方につきましては、登録をお願いしています。謝礼がでるときもありますが、基本的にはボランティアになります。(以下はその例)

- ・翻訳・通訳…海外の文献の翻訳、NPOや市民団体との折衝
- ・テープおこし…インタビュー・対談を記録したテープを活字にする作業
- ・イベント・講座の運営アシスタント…会場の手配や企画・運営のお手伝い
- ・取材記者…各学校や地域、NPOによるシティズンシップ的な取り組みの取材
- ・市民講師…各ワークショップのファシリテーター(推進役)および、ご自身の得意分野を活かした授業・講演会の講師(学校教育や社会教育、市民講座など)

### ■組織概要

名称 シティズンシップ教育推進ネット (NPO 法人申請準備中)

設立 平成15年11月

活動内容 欧米で導入されている市民教育(Citizenship Education)を日本でも導入するための研究と推進の活動です。

子どもから大人まで、あらゆる人々が、ごみの分別などの市民生活の基礎から、市民活動や社会参加・政治参加の手法などを学び、共生や公共についての理解を深め、社会における市民としての資質を養うことを目指しています。

顧問 鈴木崇弘 大阪大学特任教授

大阪大学フロンティア研究機構 副機構長

長沼豊 学習院大学助教授

アドバイザー 片山善博 鳥取県知事

### シティズンシップ教育推進ネット

(事務局)

〒194-0215

東京都町田市小山ヶ丘4-7-2-818

<http://www.citizenship.jp/>

[office@citizenship.jp](mailto:office@citizenship.jp)

代表 大久保正弘

シティズンシップ教育推進ネットメールマガジン  
配信中です!

シティズンシップ教育をはじめ、各国の市民教育・  
公民教育の情報をお伝えしています。

購読方法は、<http://www.citizenship.jp/>  
をご覧ください。

編集協力：児島素志 下出敦子

写真撮影：佐藤写真工房・佐藤隆俊 <http://sato-photo-crafts.com/>

---

2005年6月17日開催 シティズンシップ教育推進ネット 主催シンポジウム

「ジャパニーズ・デモクラシーの構築に向けて民主主義と教育，公共，個人について考える。  
～『シティズン・リテラシー』出版をとおして～」 記録報告書

---

2006年8月1日 発行

発 行 シティズンシップ教育推進ネット

事務局 〒194-0215 東京都町田市小山ヶ丘4-7-2-818

電 話 042-779-0635

FAX 042-779-0635

URL <http://www.citizenship.jp/>

---

(C) 無断複製を禁ず。